垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅲ

―垂水南遺跡第58次発掘調査―

平成30(2018)年３月

吹田市教育委員会

序

垂水南遺跡は、土地区画整理事業に伴い、昭和41（1966）年に発見されて以来、吹田市におきましてもっとも数多くの発掘調査を実施してきた遺跡です。これまでの発掘調査では、弥生時代から中世にかけて資料が得られていますが、なかでも古墳時代と平安時代を中心とする資料が数多く確認されています。

古墳時代のものでは、建物跡や川跡などのほか、滑石製品の工房跡ではないかと考えられる痕跡や、鍛冶関連の資料なども得られています。また、平安時代のものでは、平安時代初期に成立した東寺領垂水荘に関連すると考えられる墨書土器が出土しており、吹田の歴史を知る上で貴重な成果を得ています。

本書で報告する第58次調査では、主に古墳時代の川跡に関する資料が得られました。ここからは数多くの土器が出土しましたが、古墳時代のものばかりではなく、弥生時代の良好な土器も出土しました。ここで報告する調査成果が、今後、垂水南遺跡の解明につながり、吹田の歴史を知る一助となれば幸いです。

平成30（2018）年３月

吹田市教育委員会

教 育 長　原 田　勝

例　言

1. 本書は平成14（2002）年度に吹田市垂水町３丁目18－２において共同住宅建築に伴う事前調査として実施した、垂水南遺跡第58次調査の成果をまとめたものである。

２．現地における発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係（現・文化財保護課）西本安秀・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北４丁目10番１号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。

３．本報告書の執筆・編集作業は、西本と見解を取りまとめながら、堀口が行った。

４．本文中の遺物番号は、挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器実測図は１／４、石製品は１／２、木製品は１／４または１／６を基本とした。

５．図中の方位は磁北を示し、標高はT．P.（東京弯標準潮位）を示す。

６．発掘調査および報告書作成にあたっては、事業者である清水産業株式会社をはじめ、多くの方々から多大なご協力を得た。記して感謝申し上げる。

７．発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。

〔発掘調査〕

佐藤健太郎・桑原暢子・杉本まりこ・森大樹

〔整理作業〕

佐藤健太郎・花﨑晶子・小川里美・木舩安紀子・高井明美・林裕子

目　次

第１章　位置と環境 …… 1
（１）地理的環境 …… 1
（２）歴史的環境 …… 1
（３）垂水南遺跡の既往調査 …… 4
第２章　調査の経過と方法 …… 5
第３章　調査成果 …… 6
（１）基本層序 …… 6
（２）検出遺構 …… 6
（３）出土遺物 …… 11
第４章　まとめ …… 41

挿図目次

第１図　吹田市位置図 …… 1
第２図　吹田市周辺の地形 …… 1
第３図　周辺の遺跡分布地図 …… 2
第４図　垂水南遺跡調査地周辺図 …… 4
第５図　調査区配置図 …… 5
第６図　Ａ区南壁土層断面図 …… 7
第７図　Ａ区東壁土層断面図 …… 8
第８図　Ｂ区Ｇ５西壁土層断面図 …… 9
第９図　Ｂ区Ｇ７西壁土層断面図 …… 10
第10図　遺構平面図 …… 12
第11図　Ａ区Ｇ１周辺図 …… 13
第12図　Ａ区Ｐ２遺物出土状況図 …… 14
第13図　木杭検出状況図 …… 14
第14図　確認調査出土遺物 …… 15
第15図　遺物包含層出土遺物 …… 15
第16図　Ａ区Ｐ２出土遺物 …… 16
第17図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ１出土遺物 …… 17
第18図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ２出土遺物（１） …… 18

第19図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ２出土遺物（２）　…… 20
第20図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ３出土遺物　…… 22
第21図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ４出土遺物（１）　…… 24
第22図　ＳＵ１　Ａ区Ｇ４出土遺物（２）　…… 26
第23図　ＳＵ１　Ａ区出土区画不明遺物　…… 26
第24図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ５出土遺物　…… 28
第25図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ６出土遺物　…… 30
第26図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ７出土遺物（１）　…… 32
第27図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ７出土遺物（２）　…… 34
第28図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ７出土遺物（３）　…… 36
第29図　ＳＵ１　Ｂ区Ｇ７出土遺物（４）　…… 38
第30図　ＳＵ１　Ｂ区出土区画不明遺物　…… 38
第31図　木製品（１）　…… 39
第32図　木製品（２）　…… 40
第33図　石製品　…… 41

写真図版目次

図版１　Ａ区全景
図版２　Ａ区　各遺構
図版３　Ａ区　遺物出土状況
図版４　Ａ区　土層断面
図版５　Ｂ区　全景
図版６　Ｂ区　遺物出土状況（１）
図版７　Ｂ区　遺物出土状況（２）
図版８　Ｂ区　遺物出土状況（３）
図版９　Ｂ区　遺物出土状況（４）
図版10　Ｂ区　土層断面
図版11　発掘調査の記録
図版12　Ａ区　弥生土器・土師器高坏（１）
図版13　Ａ区　土師器高坏（２）
図版14　Ａ区　土師器甕（１）
図版15　Ａ区　土師器甕（２）
図版16　Ａ区　土師器壺（１）
図版17　Ａ区　土師器壺（２）
図版18　Ａ区　土師器小型丸底壺（１）
図版19　Ａ区　土師器小型丸底壺（２）
図版20　土師器鉢・器台・製塩土器
図版21　Ａ区　須恵器・韓式系土器
図版22　Ｂ区　弥生土器
図版23　Ｂ区　土師器高坏
図版24　Ｂ区　土師器甕（１）
図版25　Ｂ区　土師器甕（２）
図版26　Ｂ区　土師器壺（１）
図版27　Ｂ区　土師器壺（２）
図版28　Ｂ区　土師器小型丸底壺・製塩土器
図版29　Ｂ区　土師器鉢・土錘
図版30　Ｂ区　土師器器台・須恵器
図版31　木製品
図版32　石製品・自然遺物

第１章　位置と環境

（１）　地理的環境（第１・２図）

吹田市は大阪府北部に位置している。南は大阪市と境界を接し、その市境に沿うような形で安威川、神崎川が北東から南西に向けて流れて大阪湾に注いでいる。

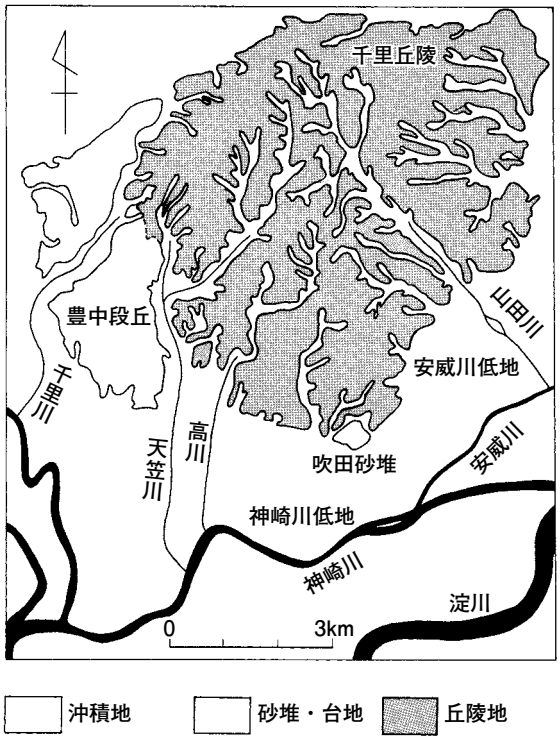
吹田市域南部には、主に神崎川や淀川などの氾濫によって形成された沖積平野が広がり、一方の市域北部は千里丘陵が占めており、市域の北部と南部とでは対照的な地形を形成している。

第１図　吹田市位置図

吹田市内において千里丘陵は標高80m以下の丘陵地帯となる。平野部は千里丘陵南端部付近を境として、東側を安威川低地、西側を神崎川低地として区分される。またＪＲ吹田駅付近より南側には、縄文海進時に形成されたとされる吹田砂堆が広がり、平野部において微高地を形成している。

（２）　歴史的環境～吹田市の弥生・古墳時代～（第３図）

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代にかけての良好な資料が得られたことから、ここでは吹田市内の弥生時代から古墳時代にかけての代表的な遺跡について概観しておく。



第２図　吹田市周辺の地形
（前田1990文献を基に作図）

・弥生時代

まず吹田市内の弥生時代を代表的する遺跡として、垂水南遺跡の北側に位置する垂水遺跡が挙げられる。同遺跡は、千里丘陵の南西端に営まれた高地性集落である。関西大学が行った第１～３次調査では、弥生時代後期の竪穴式住居４棟、掘立柱建物１棟などを検出し、続く吹田市が行った第４次調査では甕棺墓を検出した（網干1981）。

また丘麓部で行った第26次調査では、古墳時代前期の土器に混じって弥生時代前期末葉の、ほぼ完形に近い壺が出土した。さらに丘陵下南側に広がる平野部においても、やや地中深くに弥生時代の遺物の包含が確認されている。

丘陵上で見れば、現在の万博公園がある千里丘陵北東部において、明治11（1878）年、溜池工

1．垂水南遺跡
2．山田銅鐸出土地
3．七尾東遺跡
4．吹田操車場遺跡
5．五反島遺跡
6．蔵人遺跡
7．榎坂遺跡
8．北泉遺跡
9．吉志部古墳
10．新芦屋古墳
11．松下電器保健センター古墳
12．垂水西原古墳
13．出口古墳
14．吹田須恵器窯跡No.32
15．目俵遺跡
16．中ノ坪遺跡
17．高城遺跡
18．高城Ｂ遺跡
19．高浜遺跡
20．都呂須遺跡

第３図　周辺の遺跡分布図（S：1/40,000 上方が北）

事中に弥生時代中期の四区袈裟襷紋銅鐸が出土し、山田銅鐸出土地として周知されている。

一方平野部では安威川低地側に位置する中ノ坪遺跡・高城遺跡・高城Ｂ遺跡・吹田操車場遺跡・天道遺跡などがある。七尾東遺跡第１次調査では、同一地点で５回の建替えを行った痕跡を持つ、弥生時代中期後半の竪穴式住居が確認されている（吹田市教育委員会2012）。吹田操車場遺跡では、河道内から弥生時代中期の土器が出土している。出土量は多くなかったが、東海系土器の占める割合が多い傾向が見られた（吹田市2004）。

また神崎川低地側には、五反島遺跡・蔵人遺跡・榎坂遺跡などがあり、河道や流路跡埋土中より弥生時代後期を中心とする遺物が良好な状態で出土している。

・古墳時代

次に古墳時代の遺跡であるが、吹田市域で発掘調査された古墳は、吉志部古墳と新芦屋古墳の２基があり、ともに終末期古墳である。吉志部古墳は、無袖式横穴式石室を有する円墳であることが確認されている（関西大学1973）。新芦屋古墳は不時発見のため墳形は不明であるが、その主体部は木材で構築された木室墓であり、組み合わせ式の家形石棺を持つ全国的にも検出例の少ない古墳である（網干1981）。

次に吹田市域における古墳時代の特徴として挙げられるものに、須恵器の生産がある。隣接する豊中市域を含め千里丘陵上に数多くの須恵器窯が構築され、当市ではこれまでに56か所の須恵器窯が確認されている。なかでも５世紀初頭頃に構築された吹田須恵器窯跡No.32は初期須恵器窯として知られているが、吹田市域での須恵器生産は６世紀前半から７世紀前半の間に窯業の盛期をもち、７世紀末には終焉を迎えると考えられている（中村・藤原1996）。

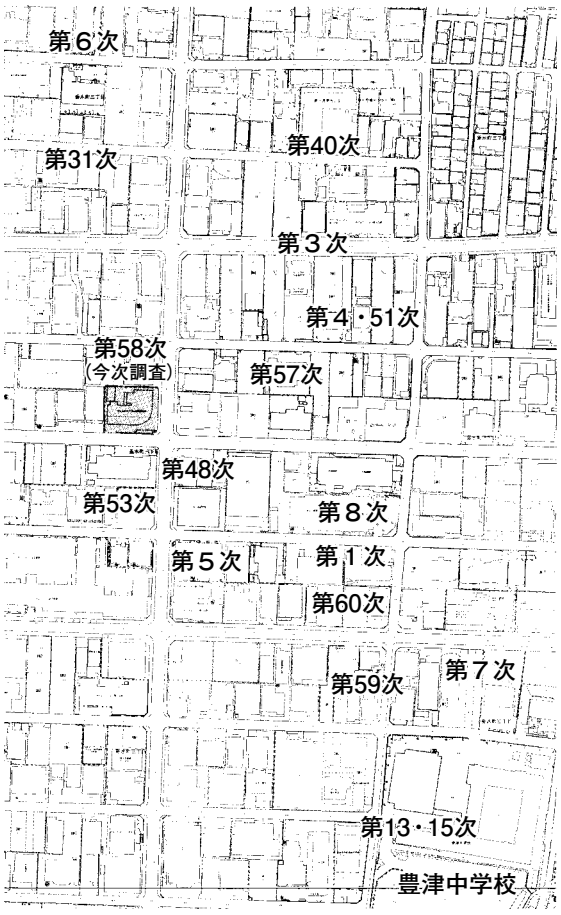
集落遺跡について見ると、丘陵南側に広がる平野部で良好な資料を伴う遺跡が多い。垂水遺跡の丘麓で実施した第24次調査では、水銀朱が付着し加熱痕のある土器片や、破砕され溶解の途中で破棄されたと考えられる銅鏡片など、古墳時代前期の良好な資料が得られている（吹田市2005）。

この他に、神崎川低地に展開する遺跡では蔵人遺跡・榎坂遺跡・五反島遺跡などが代表的なものとして挙げられ、河道跡や溝跡などから良好な資料が得られているが、榎坂遺跡では古墳時代前期の竪穴式住居２棟が検出されている。

また安威川低地に展開する遺跡には、目俵遺跡・中ノ坪遺跡・高城遺跡・高城Ｂ遺跡・吹田操車場遺跡などがある。目俵遺跡では低湿地にのぞむ微高地上に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと考えられる掘立柱建物跡が８棟確認され（吹田市1999）、中ノ坪遺跡においても古墳時代前期の６棟の掘立柱建物跡が微高地上に認められた。中ノ坪遺跡の建物跡は、庇を持つ平地式建物や高床式の総柱建物が軸線を揃えて直列するように並び、祭祀あるいは政治空間の利用を示唆させる（吹田市2012）。

古墳時代後期の資料としては、高城遺跡で空間を区画するとみられる溝やピット（吹田市2001a）、高城Ｂ遺跡では建築部材を井戸枠に転用した井戸を検出している（吹田市2001b）。

また吹田操車場遺跡では、ＪＲ岸辺駅付近で古墳時代の群集土坑を数多く検出しており、須



第４図　垂水南遺跡調査地周辺図
数字は調査次数（上方が北　S=1/5,000）

恵器生産との関連も想定されているが、群集土坑は検出面で標高７～８ｍであり、吹田操車場遺跡自体は平野部の中において河川起源の沖積低地からはやや高位置に展開している（大阪府2008）。

（３）　垂水南遺跡の既往調査～古墳時代の成果を中心に～（第４図）

垂水南遺跡は、弥生時代から中世にわたる複合遺跡である。同遺跡は、昭和41（1966）年に土地区画整備事業に伴う下水管埋設工事で、土器や木製品が多量に出土したことにより周知されることになった。

昭和51（1976）年に行われた第１次調査では、周溝を持つ方形竪穴住居や、建て替え痕のある梁間２間×桁行き３間以上の高床式建物が確認された（網干1981）。

第３次・40次調査では、河道の堤防と見られる木組み遺構を検出した。木組み遺構は盛り土に杭を打ち、自然木や建築部材の転用材を横木に置いて、その間に小枝を敷き詰めていて、護岸工法の一端が明らかになった（吹田市1977）。

第４次・51次調査では、竪穴式住居４棟と高床式建物２棟以上の柱穴を検出したほか、（吹田市教育委員会1978）、楯と思われるものを描いた絵画土器布留式甕が出土した（吹田市1996）。

第８次調査では、矢板を打ち込み通路を兼ねた幅２～３ｍの大畦畔が出土した。また畦畔周囲の土壌分析の結果、高濃度のイネ科花粉が検出されている（網干1981）。

第31次調査では、周縁に熱を受けた焼土坑のほか、砥石、フイゴ羽口、鉱滓などの遺物が出土した。

第57次調査では、古墳時代の河道において、河岸に杭を打ってこれに横木を渡し、皮紐で固定した護岸施設遺構を検出している。

その他第６次・15次・59次・60次調査では、古墳時代前期を中心とする土器集積が確認されている。

このようにこれまでの垂水南遺跡における調査では、建物跡などの居住域だけでなく、水田などの生産域や河川などの周辺環境に関連する遺構が確認されている。

【参考文献】

網干善教編　1981「考古編」『吹田市史』第８巻　吹田市史編さん委員会・吹田市役所

(財)大阪府文化財センター　2008『吹田操車場遺跡』Ⅲ

関西大学考古学研究室ほか　1973『吉志部古墳発掘調査報告』

吹田市教育委員会　1977『垂水南遺跡発掘調査概報』

吹田市教育委員会　1996『平成７年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

吹田市教育委員会　1999『目俵遺跡』

吹田市教育委員会　2001a「高城遺跡」『平成12年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

吹田市教育委員会　2001b『高城Ｂ遺跡第２次発掘調査報告書』

吹田市都市整備部・吹田市教育委員会　2004『吹田操車場遺跡』

吹田市教育委員会　2005『垂水遺跡発掘調査報告書』Ⅰ

吹田市教育委員会　2012『中ノ坪遺跡発掘調査報告書』Ⅰ

吹田市教育委員会　2015『垂水南遺跡発掘調査報告書―垂水南遺跡第57次発掘調査―』Ⅱ

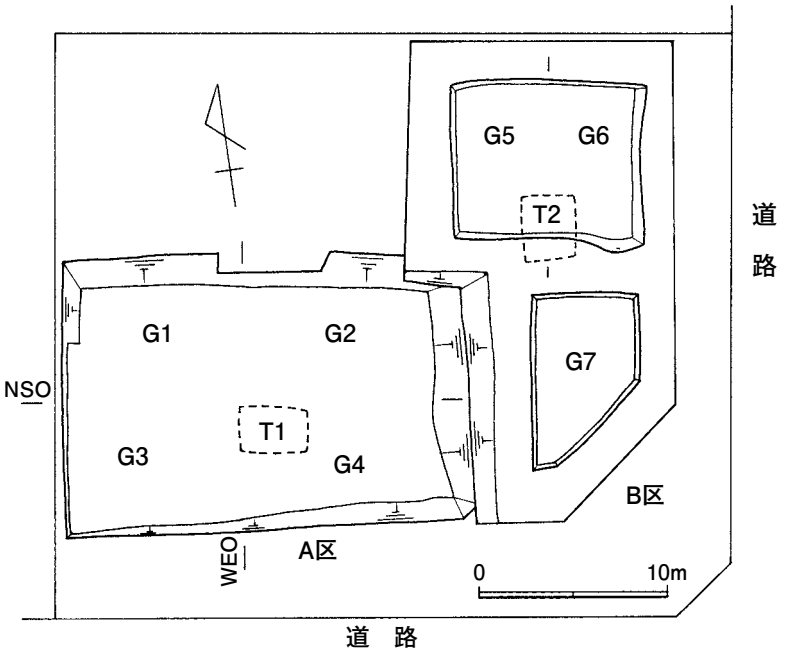
吹田市教育委員会　2017「高城遺跡」『平成28(2016)年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

中村浩・藤原学　1996『須恵器集成図録』２(近畿編Ⅱ)　雄山閣出版

前田昇　1990「地質と地形」『吹田市史』１　吹田市役所

第２章　調査の経過と方法(第５図)

今回の発掘調査は、共同住宅の建築工事に伴い実施したものである。当該工事予定地は垂水南遺跡の包蔵地内に位置していたことから、まず平成14(2002)年５月30日に確認調査を行った。その結果２か所の調査区(面積17㎡)から、古墳時代の土師器甕・壺・小型丸底壺・高坏などの遺物の出土を確認した。これにより予定される建築工事が着工された場合、遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行い、予定の建築物で遺構・遺物の破壊が考える部分について、記録保存のための拡大調査を実施したものである。



第５図　調査区配置図

拡大調査は工事予定地内の範囲のうち、遺構・遺物の包蔵が考

えられる部分について、平面形が「Ｌ」字形の調査区（面積約550㎡）を設定し、排土置き場を確保する都合上、調査区を東西に２分割して行った。まず平成14年７月30日～８月23日にかけてＡ区（Ｇ１～４）の調査を行い、調査終了後に一旦埋め戻した後、残るＢ区をＧ５・６とＧ７の順で、同年８月29日～９月25日にかけて行った。

調査区の設定後現代盛土層・攪乱層については重機を用いて掘削を行い、それより下層は人力により注意深く掘削した。そして遺物包含層を掘削する毎に遺構の検出作業を行い、検出遺構および出土状況については、写真撮影および遺構平面図・土層断面図作成などの記録作業を行った。

第３章　調査成果

（１）　基本層序（第６～９図）

当調査地は神崎川低地に立地して、北東が高く南西へ緩く傾斜しながら低くなる。調査地周辺の地表面は標高2.3 ～ 2.5ｍである。

調査区内の土層堆積状況を巨視的に見ると、地表から地山層までほぼ水平堆積である。調査区内の大部分は後述する河道埋土に相当し、現在でも帯水層となっているため、発掘調査中にも豊富な湧水が見られた。

調査区内では大きく４層の層序区分が可能であり、以下に土質の概要を記す。

第Ⅰ層：現代の盛土および攪乱層である。層厚80㎝を測る。

第Ⅱ層：暗灰色土。層厚16㎝を測る。遺物を全く含まない。旧耕土である。

第Ⅲ層：灰白色～褐灰色粘質シルト。層厚28㎝を測る。古墳時代後期の須恵器などを包含する。

第Ⅳ層：黒褐色粘土。層厚20㎝を測る。A区南側で顕著に認められたが、北側では薄くなり、B区ではほとんど確認できない。古墳時代の土師器や須恵器などを包含する。

第Ⅴ層：にぶい褐色シルト質粘土。層厚10 ～ 24㎝を測る。主にＢ区で見られる。

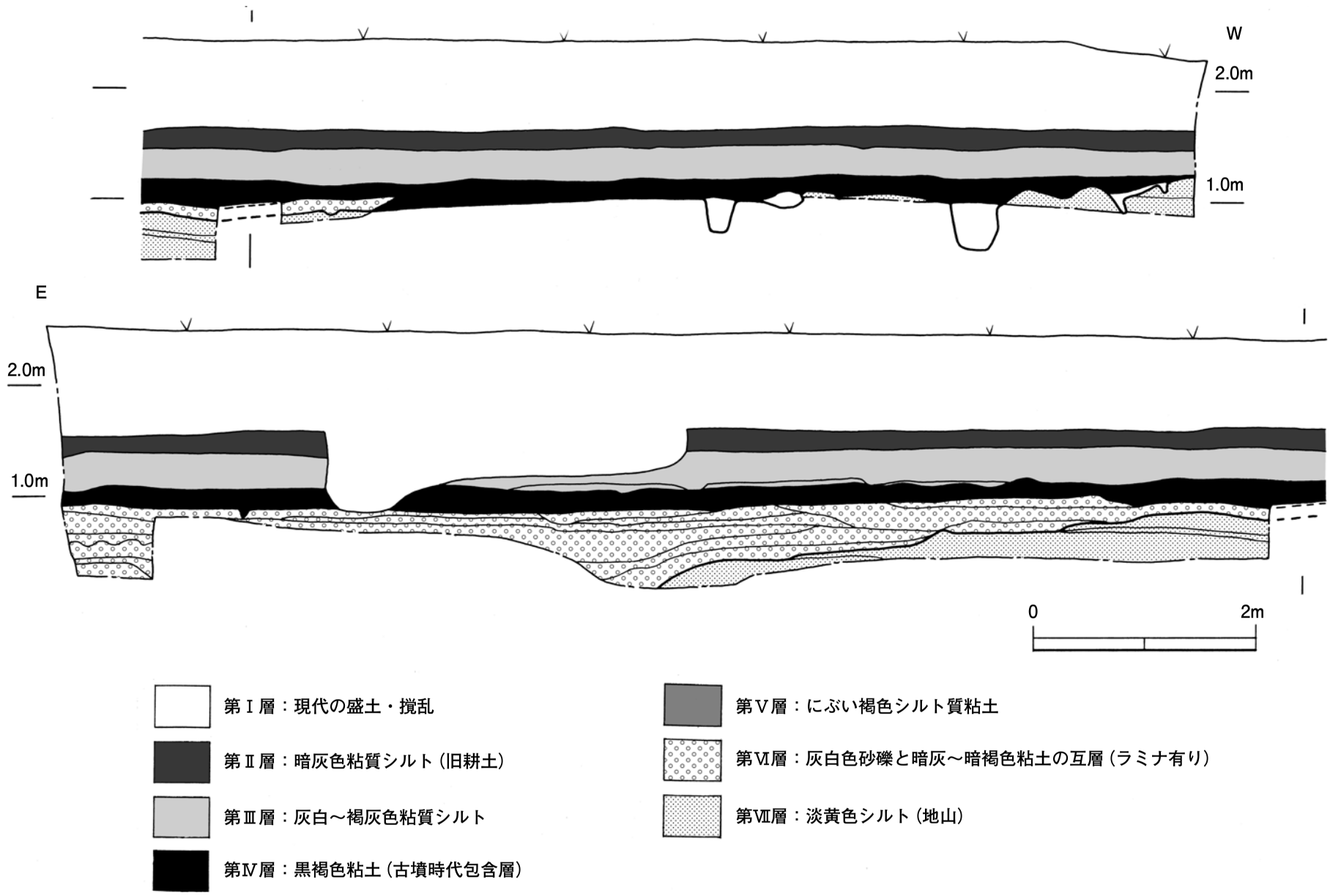
第Ⅵ層：灰白色砂礫と暗灰色～暗褐色粘土の互層。層厚120㎝以上を測る。河道堆積土で、一部に発達した葉理が認められる。

第Ⅶ層：淡黄色シルト。地山層である

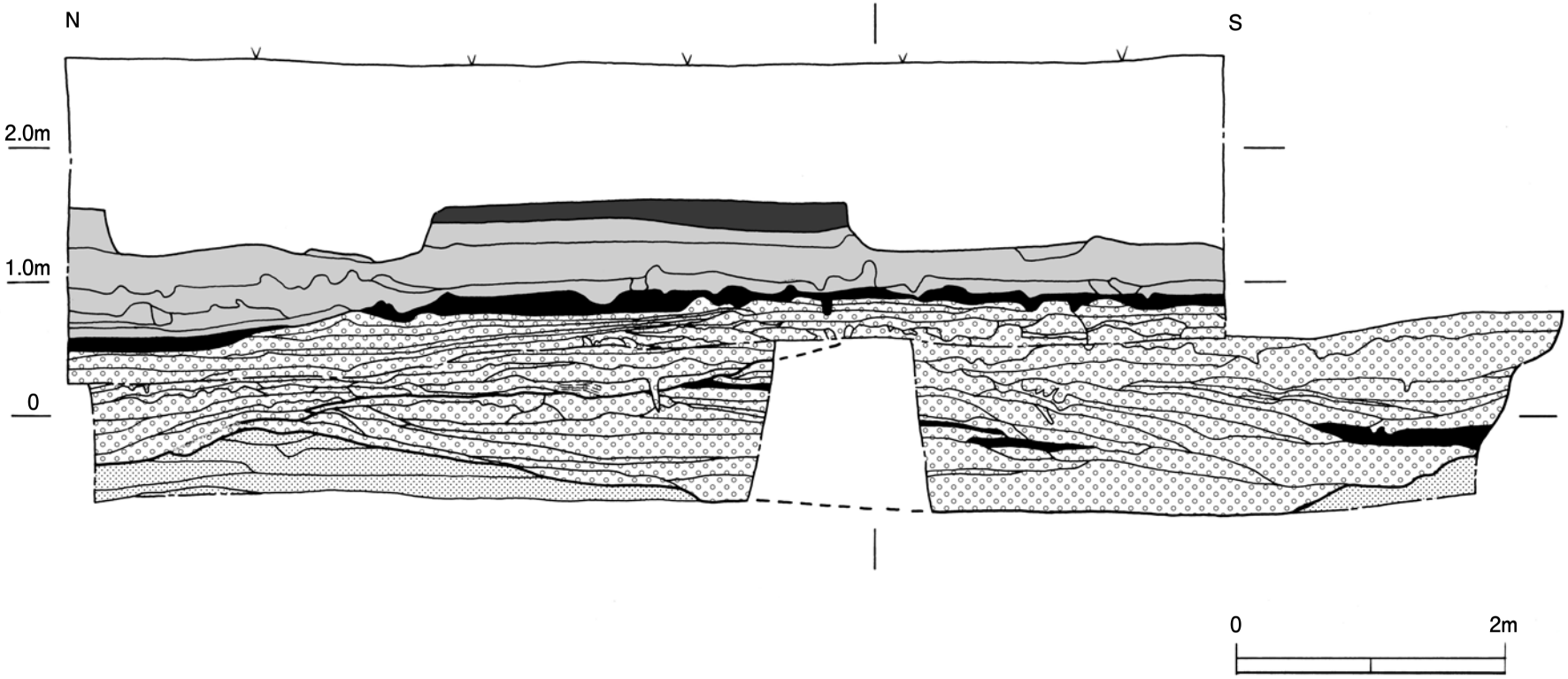
（２）　検出遺構

今次発掘調査で検出した遺構面は、標高1.2ｍ付近である。A区の西南隅（Ｇ３）でピット10基、木杭2本を検出した。またA・B両区にまたがって河道１条を検出した。以下に順を追って、各遺構の概要を記す。

なお検出遺構には一連の番号を付け、その前にＰ：ピット、ＳＵ：河道、ＳＸ：不明・その他などの分類記号を付した。



第６図　A区南壁土層断面図



第Ⅰ層：現代の盛土・撹乱

第Ⅱ層：暗灰色粘質シルト（旧耕土）

第Ⅲ層：灰白～褐灰色粘質シルト

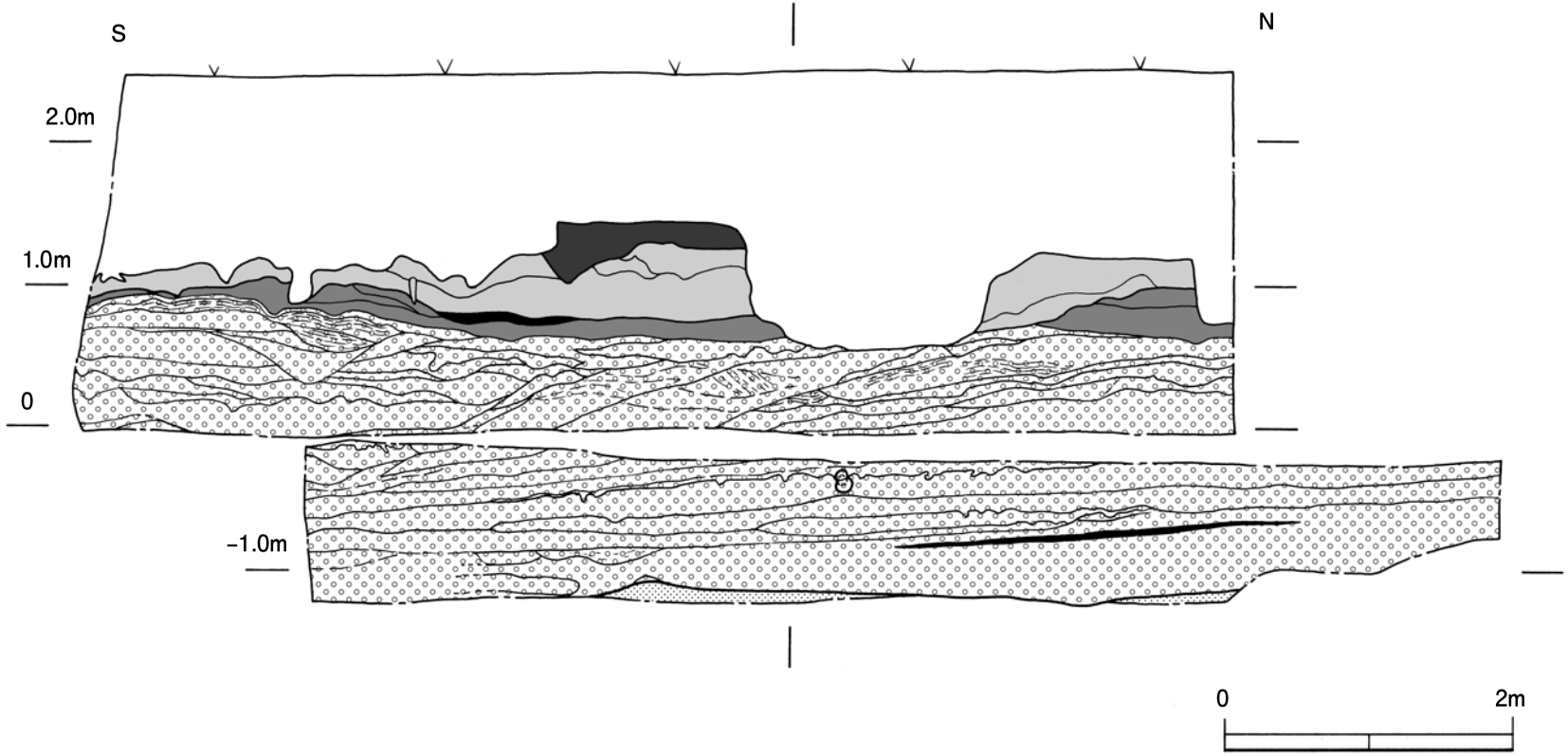
第Ⅳ層：黒褐色粘土（古墳時代包含層）

第Ⅴ層：にぶい褐色シルト質粘土

第Ⅵ層：灰白色砂礫と暗灰～暗褐色粘土の互層（ラミナ有り）

第Ⅶ層：淡黄色シルト（地山）

第７図　A区東壁土層断面図



第Ⅰ層：現代の盛土・撹乱

第Ⅱ層：暗灰色粘質シルト（旧耕土）

第Ⅲ層：灰白～褐灰色粘質シルト

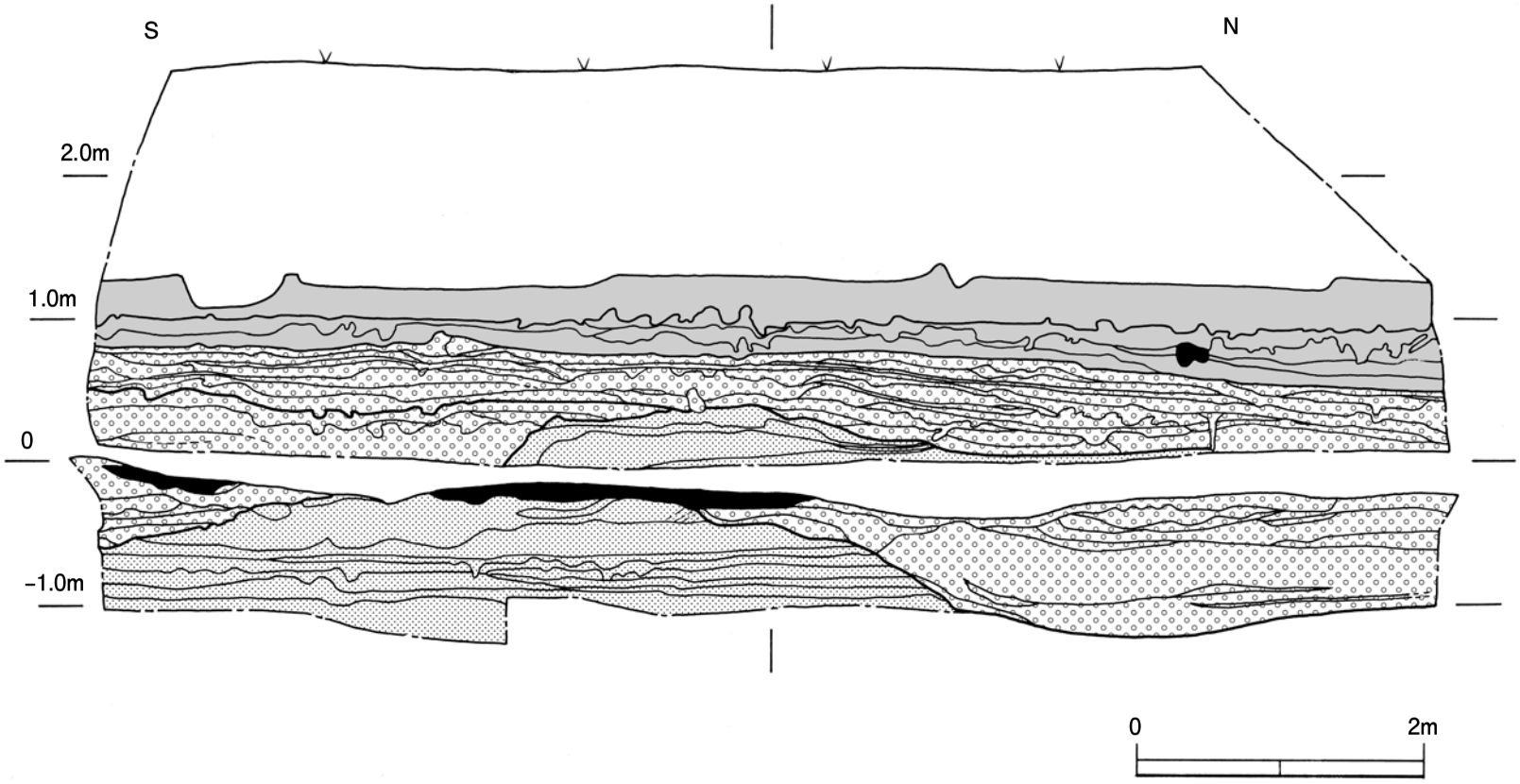
第Ⅳ層：黒褐色粘土（古墳時代包含層）

第Ⅴ層：にぶい褐色シルト質粘土

第Ⅵ層：灰白色砂礫と暗灰～暗褐色粘土の互層（ラミナ有り）

第Ⅶ層：淡黄色シルト（地山）

第８図　B区G5西壁土層断面図



第Ⅰ層：現代の盛土・撹乱

第Ⅱ層：暗灰色粘質シルト（旧耕土）

第Ⅲ層：灰白～褐灰色粘質シルト

第Ⅳ層：黒褐色粘土（古墳時代包含層）

第Ⅴ層：にぶい褐色シルト質粘土

第Ⅵ層：灰白色砂礫と暗灰～暗褐色粘土の互層（ラミナ有り）

第Ⅶ層：淡黄色シルト（地山）

第９図　B区G7西壁土層断面図

河道ＳＵ１（第10図）

調査区のほぼ全域にまたがる、概ね東西方向に流れる河道を検出した。河道は右岸の一部を検出したが、左岸は未確認で、幅32.5m以上、深さはA区で1.76m、B区Ｇ７で2.39mを測る。A区での底面の標高は西端部がＴＰ－0.6m、東端部が－0.78mを測り、西方から東方へ18cm低くなることから、流向は西から東へ流れていたと考えられる。当遺構は、発掘途中には認識できなかったが、壁面断面およびセクションベルトの観察により、河道は新旧２時期が重複している事を確認した。

河道堆積土は、流水痕の見られる褐色シルト～灰白色砂～淡黄色砂～黒褐色粘土等が複雑に幾重にも堆積し、断面観察の箇所によって層序が変化していた。

堆積土中から弥生時代中期から古墳時代後期にかけての弥生土器、古式土師器、須恵器、韓式系土器などの土器類が多量に出土した。これらの土器類は、完形や完形に復元できる物など残存状態が極めて良好であった。

なお河岸に近いＧ４とＧ７から、木杭や皮紐がややまとまって出土した。それらは河床から浮いた状態で出土し、地面に敷設された状態ではなかった。

ピットＰ１（第11図）

平面形が楕円形を呈し、東西42cm×南北32cm以上、深さ40cmを測り、調査区外へと展開する。埋土中から土師器甕の体部片が出土した。

ピットＰ２（第12図）

平面形が楕円形を呈し、東西50cm×南北23cm、深さ18cm以上を測る。埋土中から土師器甕（７）が横倒しで、体部の半分を欠損した状態で出土した。欠損部分は、後世の削平により損失した可能性もある。ピットの用途としては、廃棄土坑や埋納遺構の可能性が考えられる。

木杭（第13図）

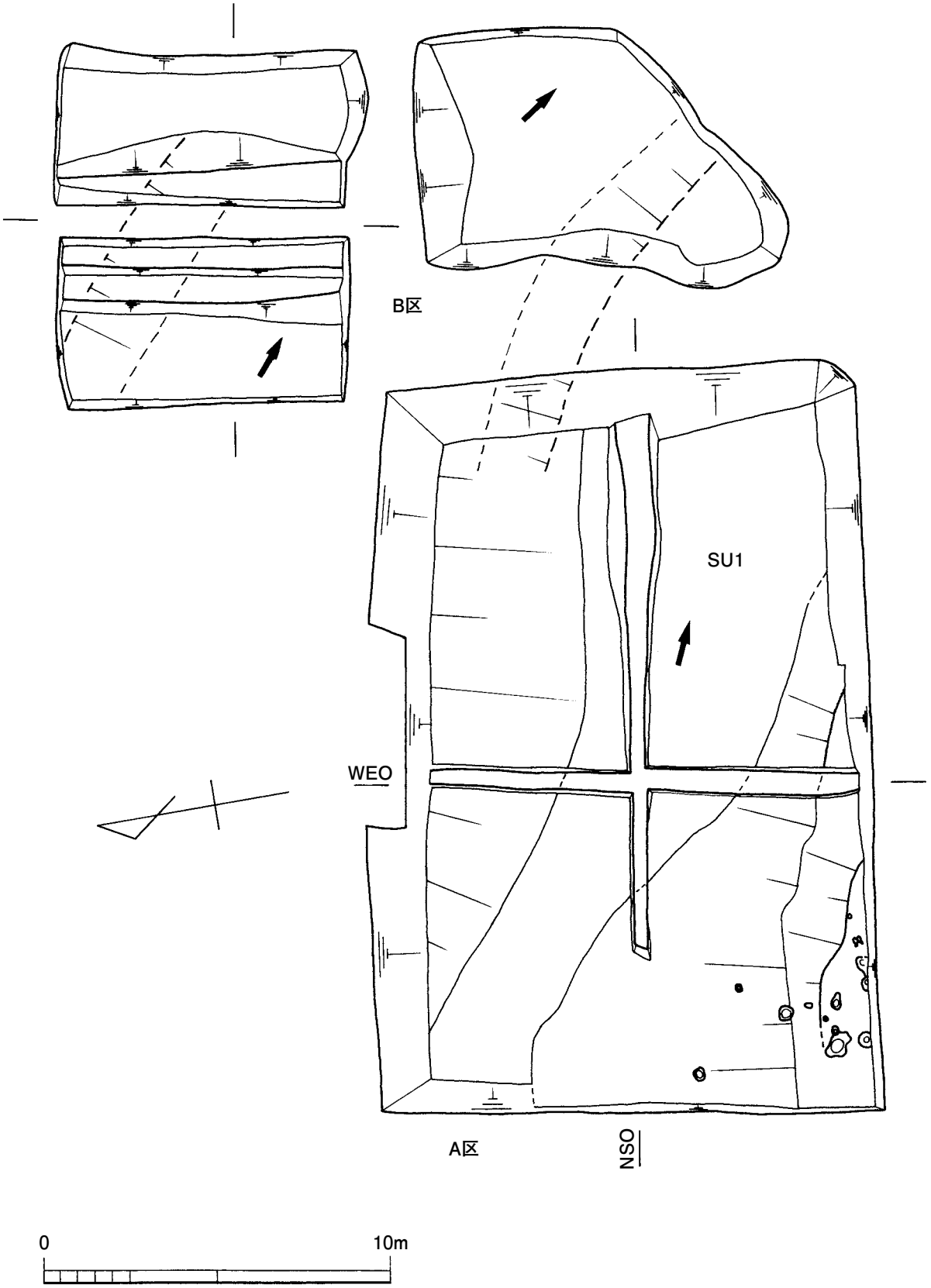
ＳＵ１の河岸で、２本の木杭が遺構面に打ち込まれた状態で出土した。木杭ＳＸ１は残存長25cm、径６cmを測る。木杭ＳＸ２は残存長15cm、径５cmを測る。両杭間は70cmを測る。ともに角杭で、先端を粗く鋭角的に加工していた。

（３） 出土遺物

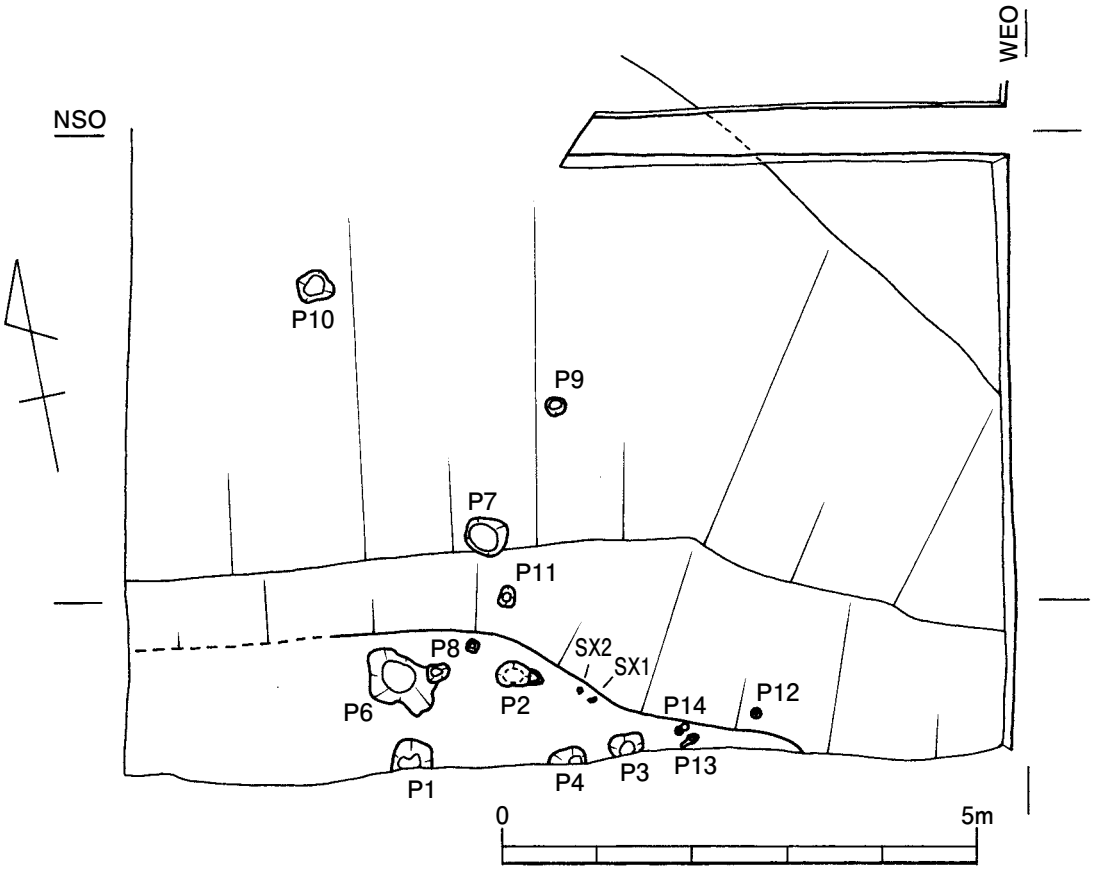
出土遺物は確認調査と併せると、コンテナ70箱分を数えた（木製品は除く）。以下に、便宜的にＡ区とＢ区の出土地区別に分けて、概要を記す。

[確認調査]（第14図）

１は四国東部系の二重口縁壺で、口縁部である。Ｔ１（Ｇ４相当箇所）出土である。口縁部



第10図　遺構平面図



第11図　A区G1周辺図

１／４からの反転復元で、残存高10.2cm、口径20.3cmを測る。口縁部上半はヘラナデ、内外面下半はハケ調整を施す。布留式期新相併行期に相当する。

２は小型丸底壺である。Ｔ２（Ｇ５－６相当）出土である。口縁部６／７を欠損し、器高8.1cm、口径7.0cm、胴径8.6cmを測る。体部内外面にヘラナデを施し、内外面に２次焼成痕が残る。布留式期新相に相当する。

[遺物包含層出土遺物]

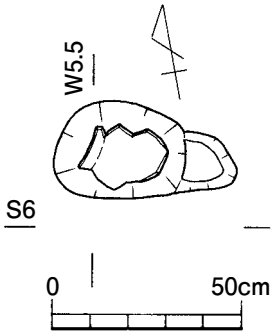
第Ⅲ層出土遺物（第15図）

須恵器、土師器などが出土した。３は須恵器坏蓋である。口縁部１／３からの反転復元で、口径11.9cm、残存高4.0cmを測る。全体的に回転ナデを施し、天井部はヘラ切り未調整である。陶邑窯（田辺編年新案）の高蔵217型式古相（７世紀前半）に相当する。

第Ⅳ層（第15図）

須恵器、土師器などが出土した。４～６は須恵器坏身である。いずれも全体的に回転ナデ、底部に回転ヘラ削りを施す。高蔵208型式（５世紀中頃）に相当する。

４は口縁部１／２からの反転復元で、器高4.7cm、口径10.4cmを測る。５は口縁部１／４から



第12図　A区 P2
遺物出土状況図

の反転復元で、器高5.2cm、口径10.5cmを測る。６は口縁部１／２からの反転復元で、器高5.2cm、口径10.2cmを測る。

[遺構出土遺物]

ピットＰ２（第16図）

７は土師器甕である。口縁部１／２からの反転復元で、残存高21.2cm、口径15.6cm、胴径22.8cmを測る。胴部も約半分が残存する。口縁部が肥厚して面を持ち、体部外面はハケ調整を施し、体部内面には指押え痕が顕著に残る。布留式期新相（古墳時代前期後半）に相当する。

河道ＳＵ１

弥生土器、古式土師器、須恵器、韓式系土器、木製品、石製品、骨角器、貝類、骨類などが多量かつ良好な状態で出土した。ただし河道堆積土はシルトや砂礫が薄く複雑に堆積していたため、大半の遺物はレベル値を記録して取り上げたが、その後の整理作業において層位別に分類することは困難であった。

遺物の出土傾向は、堆積土最上層から初期須恵器や韓式系土器など、古墳時代中期（５世紀前半）の土器類が出土した。しかしそれ以外では、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての土器類が混在して出土する状況が見られた。

以下では、便宜的に河道内をＧ１～Ｇ７の区画ごとに細分して、遺物の観察結果を記す。

Ａ区Ｇ１（第17図）

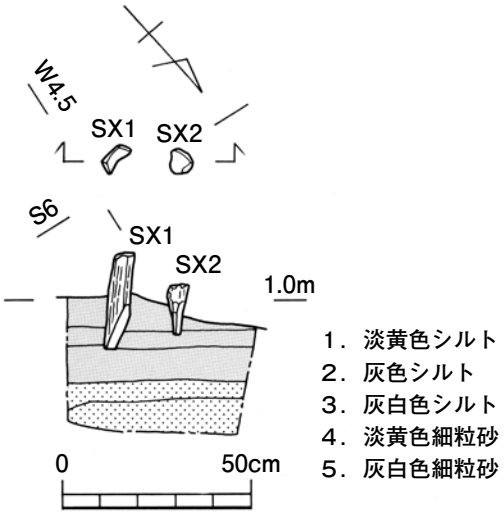
８～12は弥生土器甕である。８～10は摂津Ⅳ様式（弥生時代中期後半）に相当し、11・12も弥生時代中期頃の所産と思われる。

８は口縁部１／４からの反転復元で、残存高5.4cm、口径12.6cmを測る。体部外面は煤付着のため調整不明で、体部内面にハケ調整を施す。

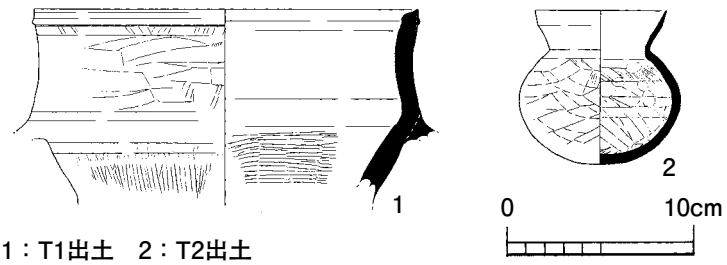
９は口縁部１／４からの反転復元で、残存高7.0cm、口径11.8cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

10は口縁部１／４からの反転復元で、残存高8.9cm、口径17.3cmを測る。体部外面は叩き後にハケ調整、体部内面はハケ調整を施す。

11は口縁部が一部欠損する。残存高20.1cm、口径15.5cm、胴径27.3cmを測る。口縁部外面に指押え痕を残し、体部外面に叩き後に板ナデ、体部内面には板ナデを施す。



第13図　木杭検出状況図



1：T1出土　2：T2出土

第14図　確認調査出土遺物

12は口縁部１／４からの反転復元で、残存高4.9cm、口径11.4cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

13～31は土師器である。13～15は甕である。13は庄内式甕である。口縁部１／２からの反転復元で、残存高6.8cm、口径16.8cmを測る。口縁部内面にハケ調整、体部外面には細かい叩き目が残り、体部内面にヘラ削りを施す。庄内式期古相（古墳時代初頭）に相当する。

14は口縁部が完存し、残存高9.6cm、口径14.2cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。概ね古墳時代の所産である。

15は東海系のＳ字状口縁甕である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高5.0cm、口径14.0cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面に板ナデを施す。松河戸Ⅰ式（４世紀前半）に相当する。

16・18～20は壺である。16は長胴壺である。ほぼ完形で、器高18.0cm、口径9.2cm、胴径13.7cmを測る。口縁部内面はハケ調整後に横ナデを施す。体部外面上半は粘土接合痕と指押え痕が顕著に残り、下半は板ナデを施し、体部内面にも粘土接合痕が顕著に残る。古墳時代の所産であろうか。

18は口縁部１／４からの反転復元で、器高14.3cm、口径9.4cm、胴径13.1cmを測る。体部外面はハケ調整を施して、一部に縄目らしき叩き痕が残り、体部内面はハケ調整後に部分的に板ナデを施す。布留式期中～新相（古墳時代前期）に相当する。

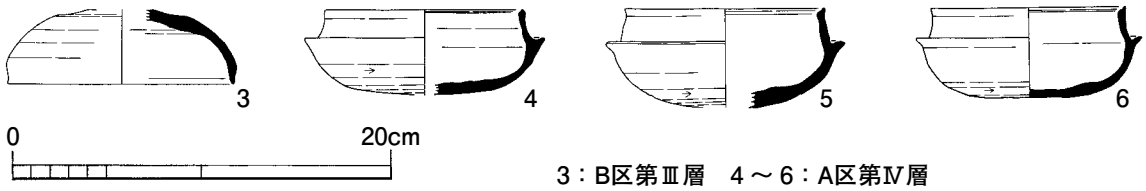
19は口縁部を一部欠損し、器高12.3cm、口径9.6cm、胴径11.2cmを測る。口縁部内面と体部外面にハケ調整を施す。古墳時代前期の所産である。

20は吉備系の二重口縁壺である。口縁部を一部欠損し、器高14.1cm、口径11.1cm、胴径15.6cmを測る。体部外面にハケ調整を施す。古墳時代中期（５世紀代）の所産である。

17・21～23は小型丸底壺で、布留式期（古墳時代前期）に相当する。

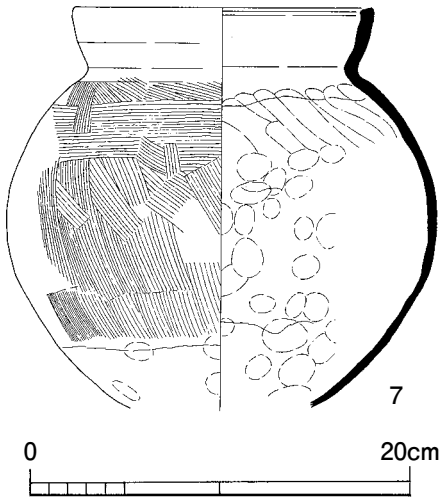
17は口縁部を一部欠損し、器高10.0cm、口径９cm、胴径10.4cmを測る。体部外面下半にハケ調整、体部内面はヘラナデを施す。

21は口縁部の約半分を欠損し、体部は完存する。器高9.8cm、口径8.3cm、胴径9.6cmを測る。口縁部内面に板ナデを施し、体部外面にハケ調整の痕跡が残る。



3：B区第Ⅲ層　4～6：A区第Ⅳ層

第15図　遺物包含層出土遺物



第16図　A区　P2出土遺物

22はほぼ完形で、器高8.0cm、口径7.4cm、胴径9.4cmを測る。焼成後体部中央に縦長の孔を穿つ。口縁部内面と体部外面はハケ調整後にナデを施し、体部内面下半に指押え痕が残る。

23はほぼ完形で、器高6.5cm、口径9.0cm、胴径7.0cmを測る。体部外面下半にヘラナデを施す。

24・25は小型鉢である。ともに庄内式期新相（古墳時代初頭）に相当する。24は口縁部１／４からの反転復元で、器高5.3cm、口径9.6cmを測る。口縁部内外面に指押え痕を残し、体部内外面に板ナデを施す。

25は完形で、器高5.0cm、口径7.2cmを測る。体部外面に磨きを施す。

26は二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／８からの反転復元で、残存高5.6cm、口径15.3cmを測る。概ね古墳時代の所産である。

27は山陰系の鼓形器台の脚部である。裾部１／４からの反転復元で、残存高4.2cm、裾径15.2cmを測る。脚部外面はハケ調整後に磨き、受け部内面は磨き、脚部内面はヘラ削りを施す。庄内式期～布留式期古相（古墳時代初頭～前期）に相当する。

28～30は高坏である。いずれも布留式期（古墳時代前期）に相当する。28は高坏の坏部から脚部の一部にかけての部分である。残存高11.9cm、口径16.6cmを測る。坏部外面にハケ調整、坏部内面はハケ調整後に磨き、脚部外面はヘラナデ、脚部内面はヘラ削りを施す。

29は高坏の坏部である。残存高5.0cm、口径15.7cmを測る。坏部内面上半にハケ調整を施す。

30は高坏の坏部である。２／３残存し、残存高6.4cm、口径12.4cmを測る。全体的にナデ調整を施す。

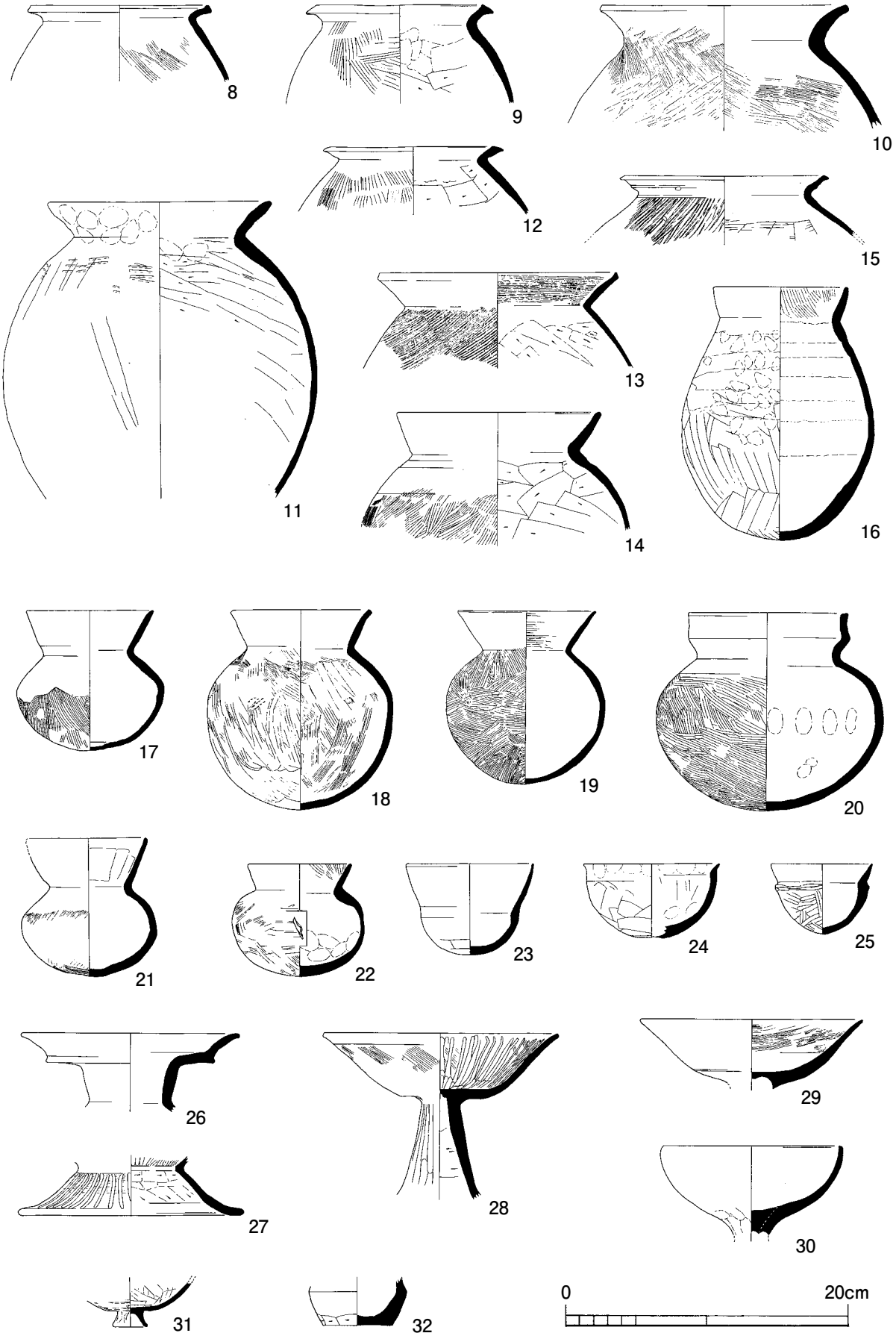
31は鉢形製塩土器の脚部である。残存高3.6cm、裾径2.3cmを測る。外面に叩き、内面にヘラ削りを施す。布留式期（古墳時代前期）に相当する。

32は韓式系土器広口小壺の体部である。残存高3.4cm、底径6.7～7.0cm、胴径4.8cmを測る。体部下部に手持ちヘラ削りを施し、底面にゲタ痕をナデ消す。全体的に灰黄色を呈する。古墳時代中期（５世紀代）の所産である。

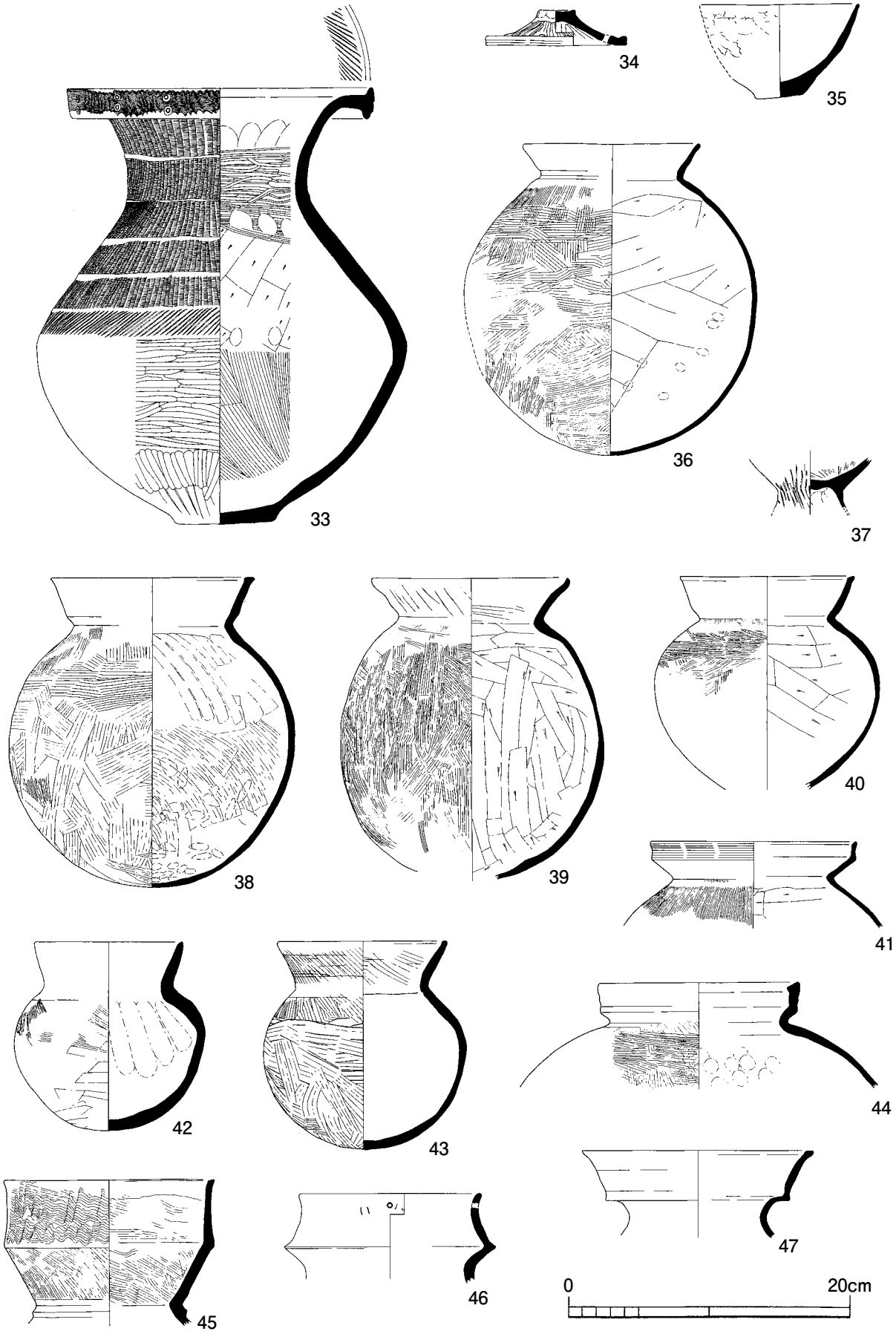
Ａ区Ｇ２（第18・19図）

33～35は弥生土器である。いずれも摂津Ⅳ様式（弥生時代中期後半）に相当する。33は壺である。完形で、器高30.8cm、口径21.3～21.6cm、胴径26.4cm、底径6.3～6.6cmを測る。頸部内面と体部外面下半に磨き、体部内面上半にヘラ削り、下半にハケ調整を施す。口縁部外面に波状文と上下２列の円形浮紋、口縁部内面に刺突文、頸部から体部上半にかけて簾状文を施す。

34は壺の蓋である。全体の３／４が残存し、器高2.6cm、口径9.9cmを測る。天井部に磨き、内



第17図　SU1　A区G1出土遺物



第18図　SU1　A区G2出土遺物 (1)

面に板ナデを施す。周縁部に２個一対の小孔を穿つ。

35は鉢である。口縁部１／２からの反転復元で、器高6.7㎝、口径11.2㎝、底径3.4㎝を測る。内外面ともにナデ調整を施す。

36 ～ 61は土師器である。いずれも布留式期（古墳時代前期）に相当する。

36 ～ 41は甕である。36は口縁部の一部を欠損し、器高22.4㎝、口径12.3㎝、胴径20.8㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。

37は東海系甕の底部から台部にかけての一部である。残存高3.5㎝を測る。体部内外面にハケ調整を施す。

38はほぼ完形で、器高22.2㎝、口径14.2㎝、胴径20.3㎝を測る。口縁端部は肥厚して面を持つ。体部外面にハケ調整、体部内面上半に指ナデ、下半にハケ調整を施し、底面に指押え痕を残す。

39は口縁部の一部と底部欠損し、残存高21.7㎝、口径13.8㎝、胴径18.7㎝を測る。口縁端部は上方を向く。口縁部外面にヘラナデ、口縁部内面にハケ調整、体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

40は胴部１／２からの反転復元で、残存高15.2㎝、口径12.2㎝、胴径16.0㎝を測る。口縁端部が肥厚し面を持つ。体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施し、肩部に刺突文を等間隔に施す。

41は吉備系土器である。口縁部１／２からの反転復元で、残存高6.2㎝、口径14.5㎝を測る。口縁部外面は疑凹線となり、体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。

42 ～ 47は壺である。42はほぼ完形で、器高13.5㎝、口径10.4㎝、胴径13.5㎝を測る。体部上半にハケ調整、下半に板ナデ、内面上半に指ナデを施す。

43はほぼ完形で、器高14.9㎝、口径11.8㎝、胴径14.5㎝を測る。口縁部内外面はハケ調整後に横ナデを施し、体部外面にハケ調整を施す。

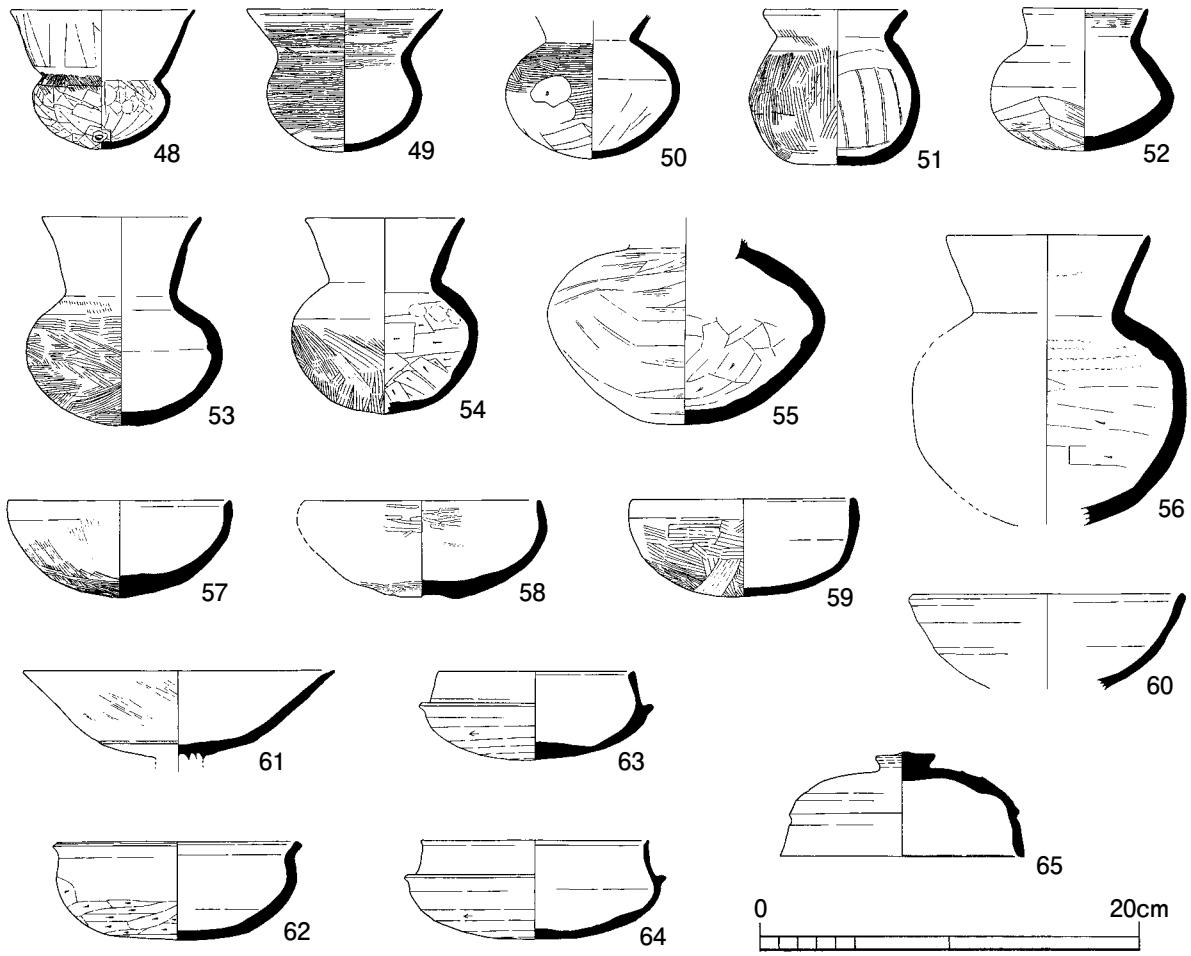
44は吉備系土器である。口縁部１／５からの反転復元で、残存高7.6㎝、口径14㎝を測る。口縁部が肥厚し面を持つ。体部外面にハケ調整を施し、内面に指押え痕を残す。

45・46は四国東部系の二重口縁壺の口縁部である。45は口縁部１／４からの反転復元で、残存高10.4㎝、口径15.0㎝を測る。口縁部外面上半に波状文を密に施し、頸部に突帯を巡らす。口縁部内外面にハケ調整を施す。

46は口縁部１／４からの反転復元で、残存高6.1㎝、口径12.8㎝を測る。口縁部に小孔を穿つ。

47は山陰系の二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／６からの反転復元で、残存高6.2㎝、口縁部16.8㎝を測る。

48 ～ 54は小型丸底壺である。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。48は口縁部が２／３残存し、器高7.4㎝、口径9.6㎝、胴径9.3㎝を測る。口縁部外面に板ナデ、体部外面はハケ調整後にヘラ削り、内面に板ナデを施す。肩部に１条の沈線を巡らし、体部下半に焼成後の小孔を穿つ。内・外面に煤が付着する。



第19図　SU1　A区G2出土遺物 (2)

49は口縁部１／４からの反転復元で、器高7.5cm、口径10.4cm、胴径8.2cmを測る。口縁部内外面と体部外面に磨きを施す。

50は器高7.6cm、胴径9.3cmを測る。体部外面上半に磨き、体部外面下半と内面下半に板ナデを施す。焼成後体部に小孔を穿つ。

51は口縁部を１／３ほど欠損し、器高8.3cm、口径7.4cm、胴径9.0cmを測る。体部外面にハケ調整を施し、内面は指ナデを施す。底部はやや平底気味となる。

52は口縁部を１／３ほど欠損し、器高7.6cm、口径6.5cm、胴径9.7cmを測る。口縁部内面にハケ調整、体部外面下半に板ナデを施す。

53 ～ 56は壺である。53はほぼ完形で、器高11.1cm、口径8.4cm、胴径10.0cmを測る。体部外面にハケ調整を施す。

54は完形で、器高11.4cm、口径8.2cm、胴径9.8cmを測る。体部外面下半にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。

55は壺の体部である。残存高9.9cm、胴径14.6cmを測る。体部外面は丁寧なヘラナデ、内面下半はヘラ削りを施す。

56は部分的に欠損し、器高15.4cm、口径10.6cm、胴径14.5cmを測る。体部内面にヘラ削りを施

す。

57 ～ 60は浅鉢である。57は口縁部が４／５残存し、器高5.2㎝、口径11.9㎝を測る。外面にハケ調整を施す。

58は全体の３／５が残存し、器高5.2㎝、口径12.5㎝、胴径13.1㎝、底径3.2㎝を測る。底部は碁笥底気味になる。口縁部に磨き、底部は篦ナデを施す。底部はやや上げ底状の平底となる。

59は全体の２／３が残存し、器高5.2㎝、口径11.7㎝を測る。体部外面にハケ調整を施す。

60は口縁部１／３からの反転復元で、残存高5.0㎝、口径14.3㎝を測る。体部外面上半から内面にかけて板ナデを施す。

61は高坏の坏部である。坏部は完存し、残存高4.8㎝、口径16.5㎝を測る。坏部外面はハケ調整後にナデ消す。

62は韓式系土器鉢で、焼成は瓦質である。ほぼ完形で器高5.2㎝、口径12.5 ～ 12.7㎝、胴径12.5 ～ 12.8㎝を測る。体部下半に手持ちヘラ削りを施す。古墳時代中期（５世紀中頃）の所産である。

63 ～ 65は須恵器である。63・64は坏身である。ともに体部下半に回転ヘラ削りを施す。63は完形で、器高4.7㎝、口径10.2 ～ 10.7㎝を測る。高蔵216型式（５世紀前半）に相当する。

64は口縁部１／３からの反転復元で、器高5.2㎝、口径12.0㎝を測る。高蔵208型式（５世紀中頃）に相当する。

65は高坏蓋である。口縁部を一部欠損し、器高5.1㎝、口径12.5 ～ 12.8㎝を測る。灰被りのため天上部の調整は不明である。高蔵208型式（５世紀中頃）に相当する。

Ａ区Ｇ３（第20図）

66は弥生土器台付鉢である。口縁部１／２からの反転復元で、残存高9.4㎝、口径11.8㎝、胴径10.2㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面に板ナデを施す。底部に脚の痕跡が残る。摂津Ⅵ様式（弥生時代後期）に相当する。

67 ～ 76は土師器である。73は庄内式期（古墳時代初頭）、それ以外は布留式期（古墳時代前期）に相当する。

67 ～ 71は小型丸底壺である。67は全体の３／５が残存し、器高8.9㎝、口径8.4㎝、胴径9.0㎝を測る。体部外面上半にハケ調整、下半に板ナデ、内面に指ナデを施す。

68は完形で、器高10.7㎝、口径9.6㎝、胴径10.4㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。焼成後体部に小孔を穿つ。

69は全体の４／５が残存し、器高9.0㎝、口径9.0㎝、胴径9.8㎝を測る。体部外面下半に板ナデ、内面下半に指ナデを施す。

70は完形で、器高8.3㎝、口径8.0㎝、胴径9.1㎝、底径2.3 ～ 2.9㎝を測る。体部外面下半は手持ちヘラ削り、内面下半は指ナデを施し、底部は平底となる。焼成後肩部に小孔を穿つ。韓式系土器の影響の可能性がある。

71は口縁部３／４が欠損し、器高9.8cm、口径6.4cm、胴径9.8cmを測る。体部外面上半に叩き目の痕跡が残る。

72は壺の体部である。残存高10.8cm、胴径11.6cmを測る。体部外面上半はハケ調整、下半は板ナデ、内面はヘラ削りを施す。

73は片口鉢である。残存高9.3cm、口径12.7cm、胴径11.0cmを測る。体部外面と口縁部内面にハケ調整、体部内面に板ナデを施す。器形から判断して、底部に脚が付く可能性がある。

74は二重口縁壺の口縁部である。一部を欠損し、残存高4.8cm、口径27.8cmを測る。口縁部外面に細かい磨き、内面にやや粗い磨きを施す。突帯部に２個一対の円形浮紋を施す。

75・76は高坏の脚部である。75は残存高6.9cm、口径12.7cmを測る。内外面ともにハケ調整を施す。

76は残存高10.8cm、裾径10.2cmを測る。脚部と裾部内面にハケ調整、脚部内面にヘラ削りを施す。

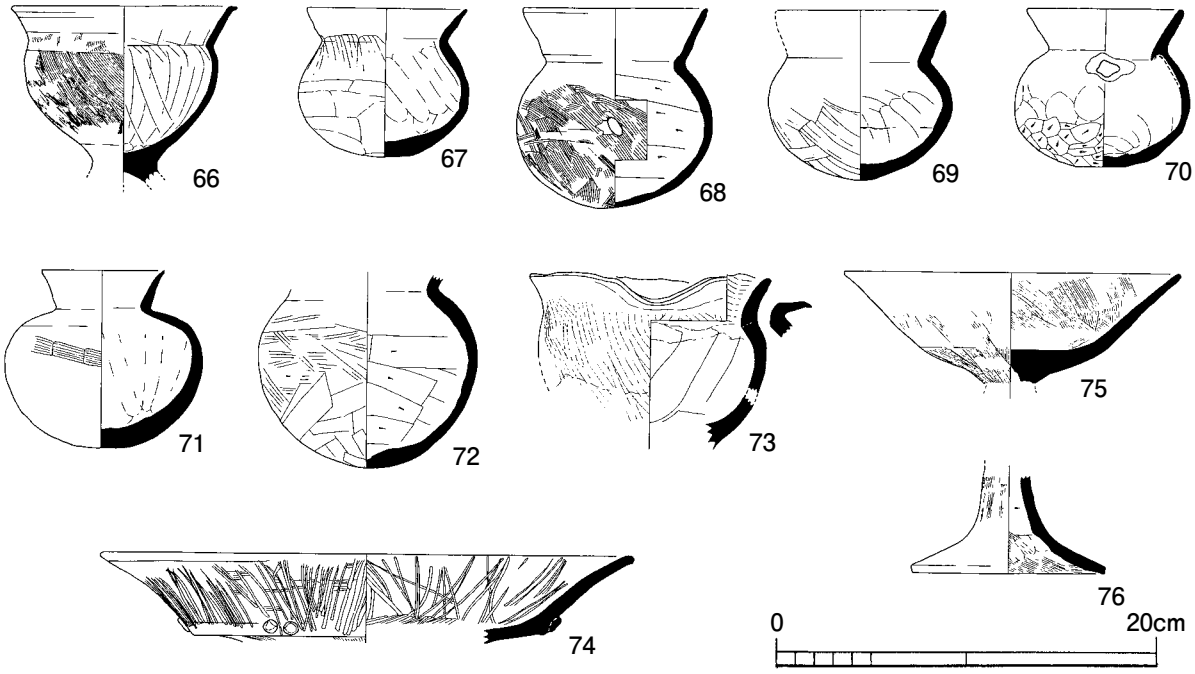
Ａ区Ｇ４（第21・22図）

77～104は土師器である。82・88は庄内式期（古墳時代初頭）に相当し、98は古墳時代中期（５世紀代）の可能性がある。それ以外は概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。

77・79は甕である。77は残存高19.1cm、口径11.6cm、胴径18.1cmを測る。口縁部から体部外面にかけて、ハケ調整後に板ナデを施す。体部内面上半は粘土接合痕と指押え痕を顕著に残し、下半はヘラ削りを施す。全体的にやや粗雑な作りである。

79は残存高6.2cm、口径11.0cmを測る。口縁部内面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

78・80・83・84は壺である。78は二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／４からの反転復元



第20図　SU1　A区G3出土遺物

で、残存高5.6cm、口径12.4cmを測る。口縁端部が肥厚し、内外面の上半にハケ調整を施す。

80は四国東部系の二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高10.4cm、口径18.4cmを測る。口縁部内外面下半にハケ調整を施す。なお確認調査のＴ１出土土器(1)とは接合はできないが、出土地点が近く形状も似ることから同一個体の可能性がある。

83は壺の体部である。残存高10.8cm、胴径15.2cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面下半に板ナデを施す。

84は口縁部が１／３を欠損し、器高13.9cm、口径11.2cm、胴径13.0cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面に指ナデを施す。

81・82・85～99は小型丸底壺である。81は体部である。残存高5.9cm、胴径8.4cmを測る。外面にハケ調整内面に板ナデを施す。

82は口縁部１／４からの反転復元で、残存高6.5cm、口径11.6cm、胴径8.7cmを測る。体部外面にハケ調整の痕跡が残る。

85は完形で、器高11.2cm、口径8.6cm、胴径10.1cmを測る。全面にナデ調整を施す。86は口縁部が１／３残存し、体部は完存する。器高8.7cm、口径9.2cm、胴径9.3cmを測る。体部外面と口縁部内面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

87は口縁部１／３を欠損し、体部は完存する。器高9.7cm、口径9.4cm、胴径9.3cmを測る。口縁部内外面と体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。焼成後底部に孔を穿つ。

88は口縁部を１／２欠損し、体部はほぼ完存するが、底部を剥離する。器高9.2cm、口径10.4cm、胴径9.1cmを測る。口縁部内面に板ナデ、体部外面にハケ調整を施す。吉備系土器と思われる。

89は口縁部の１／３を欠損するし、器高9.7cm、口径8.9cm、胴径9.3cmを測る。体部外面上半にハケ調整、下半に板ナデ、体部内面下半にヘラ削りを施す。

90は口縁部の１／４を欠損し、器高9.4cm、口径8.2cm、胴径9.9cmを測る。体部外面はハケ調整後にナデを施し、内面はヘラ削りを施す。

91は口縁部と体部の一部を欠損し、器高9.1cm、口径8.9cm、胴径9.7cmを測る。口縁部内面と体部外面にハケ調整、体部内面上半にヘラ削りを施す。

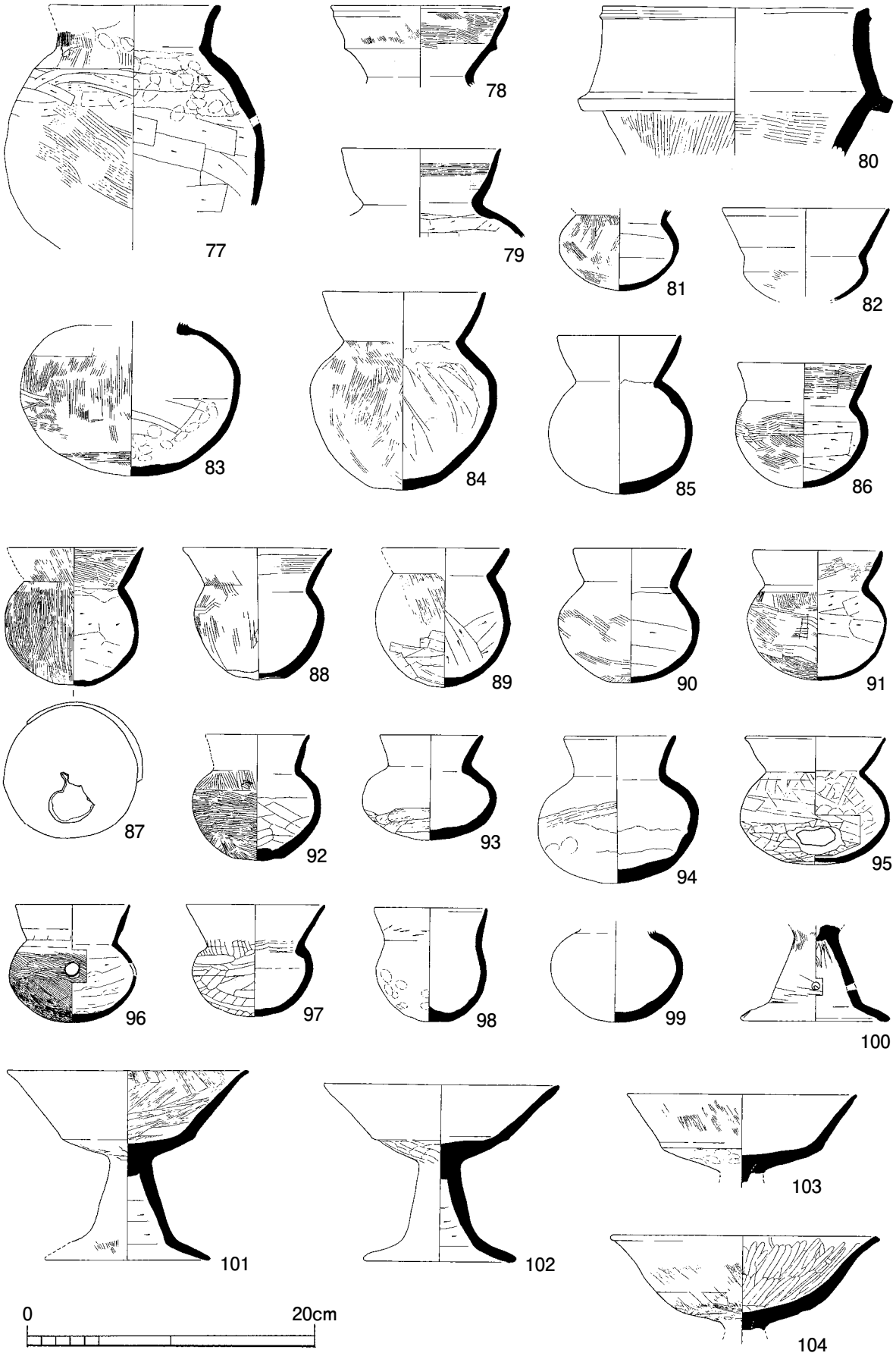
92は口縁部を１／２欠損し、器高8.9cm、口径7.2cm、胴径9.0cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面下半に板ナデを施す。

93は口縁部を一部欠損し、体部は完存する。器高7.4cm、口径7.2cm、胴径9.4cmを測る。体部外面下半に板ナデを施す。

94は口縁部が一部残存し、体部は完存する。器高10.3cm、口径8.2cm、胴径11.2cmを測る。体部外面の一部に叩き目が残り、内面には粘土接合痕が残る。

95は口縁部を一部欠損し、体部は完存する。器高9.0cm、口径9.7cm、胴径10.4cmを測る。体部外面上半は板ナデ、下半は手持ちヘラ削り、体部内面は板ナデを施す。焼成後体部に孔を穿つ。

96は口縁部を一部欠損し、器高8.3cm、口径7.9cm、胴径8.9cmを測る。体部外面にハケ調整を



第21図　SU1　A区G4出土遺物（1）

施し、焼成後体部に円形孔を丁寧に穿つ。

97は口縁部を１／４欠損し、体部は完存する。器高7.9㎝、口径9.6㎝、胴径8.4㎝を測る。口縁部内面にハケ調整の痕跡が残り、体部外面は板ナデを施す。

98は完形で、器高8.0㎝、口径7.8㎝、胴径7.7㎝を測る。体部外面に指押え痕を残すやや雑な作りである。

99は体部が完存し、残存高6.5㎝、胴径9.2㎝を測る。体部内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

100 ～ 104は高坏である。100は高坏の脚部である。裾部を一部欠損し、残存高6.4㎝、裾径10.0㎝を測る。脚部外面はハケ調整後に板ナデ、脚部内面にも板ナデを施す。脚部に円孔を１か所のみ穿つ。

101は坏部と裾部がともに１／２残存し、器高13.3㎝、口径13.3㎝、裾径11.4㎝を測る。坏部内面に板ナデを施し、脚部裾部にハケ調整の痕跡が残り、脚部内面にヘラ削りを施す。

102は坏部が１／２残存し、脚部は完存する。器高12.4㎝、口径16.4㎝、裾径10.4㎝を測る。坏部外面下半に指押え痕が残り、脚部内面にヘラ削りを施す。

103・104は高坏の坏部である。103は坏部が１／２残存し、残存高6.2㎝、口径15.8㎝を測る。坏部外面上半にハケ調整の痕跡が残る。

104は坏部が完存し、残存高6.6㎝、口径18.4㎝を測る。坏部外面にハケ調整、坏部内面に磨きを施す。

105は韓式系土器広口壺である。口縁部を一部欠損し、残存高11.0㎝、口径13.6㎝を測る。接合はできないが、同一個体と思われる体部から底部にかけての破片が出土している。体部外面は縄蓆叩きを施した後に、螺旋状沈線を巡らす。古墳時代中期（５世紀代）の所産であろう。

106は陶質土器もしくは初期須恵器広口壺である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高8.4㎝、口径17.8㎝を測る。体部外面は縄蓆叩きを施した後に螺旋状沈線を巡らす。古墳時代中期（５世紀代）の所産であろう。

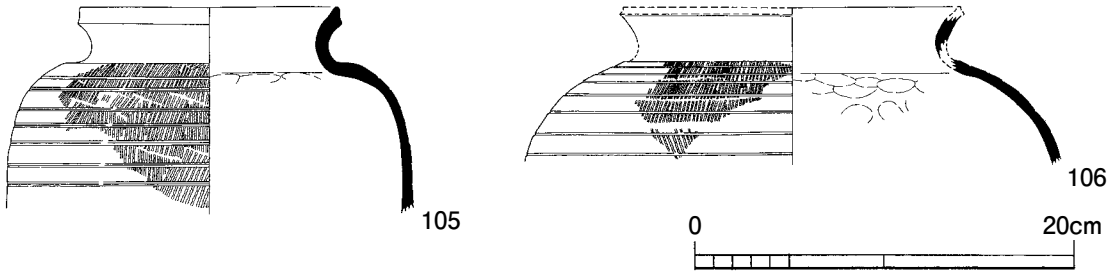
なお105と106は、焼成が異なるものの、口縁部の形状や体部外面の調整技法が酷似する。

Ａ区区画不明（第23図）

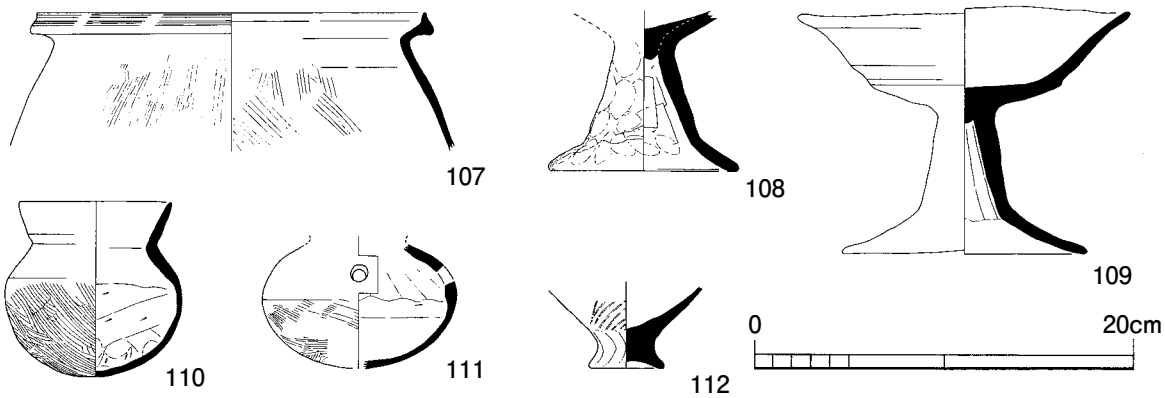
107は弥生土器甕である。Ｇ２－４間で出土した。口縁部１／３からの反転復元で、残存高7.3㎝、口径20.5㎝を測る。体部内外面ともにハケ調整を施す。摂津Ⅳ様式（弥生時代中期後半）に相当する。

108 ～ 112は土師器である。111は古墳時代中期（５世紀代）、それ以外は布留式期（古墳時代前期）に相当する。108は高坏の脚部から坏底部にかけてであり、脚部は完存する。残存高8.5㎝、裾径9.8㎝を測る。脚部外面に指押え痕が残り、脚部内面にヘラ削りを施す。

109は高坏である。Ｇ３－４間で出土した。坏部と裾部の一部を欠損し、器高12.8㎝、口径17.5㎝、裾径12.8㎝を測る。全体にナデ調整を施す。



第22図　SU1　A区G4出土遺物（2）



第23図　SU1　A区出土区画不明遺物

110は小型丸底壺である。Ｇ３―４間で出土した。ほぼ完形で、器高9.8cm、口径8.0cm、胴径9.4cmを測る。体部外面下半にハケ調整、内面下半にヘラ削りを施す。

111は須恵器瑳の模倣土器である。残存高6.6cm、胴径10.4cmを測る。体部外面下半にハケ調整、内面下半にヘラ削りを施し、体部に円孔を穿つ。

112は鉢形製塩土器の体部下半から脚部にかけての破片である。残存高4.3cm、底径3.6cmを測る。体部外面に叩き痕を残す。

Ｂ区Ｇ５（第24図）

113 ～ 116は弥生土器である。113・114は摂津Ⅳ様式（弥生時代中期後半）、115は摂津Ⅴ～Ⅵ様式（弥生時代後期）である。

113 ～ 115は甕である。113は口縁部１／４からの反転復元で、残存高8.4cm、口径10.4cm、胴径13.0cmを測る。体部外面にハケ調整、体部内面下半に磨きを施す。

114は甕の体部下半で、残存高7.7cm、底径6.3cmを測る。体部内外面ともに板ナデを施す。

115は口縁部１／４からの反転復元で、残存高11.9cm、口径15.6cm、胴径21.2cmを測る。体部外面は叩き目が残り、口縁部内面にハケ調整、体部内面上半にヘラ削りを施す。

116 ～ 130は土師器である。116・117・119・121・123は甕である。116・117は庄内式期（古墳時代初頭）に相当し、それ以外は概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。

116は口縁部を一部欠損する。器高14.1cm、口径12.2cm、胴径13.8、底径3.1cmを測る。口縁部

内面から体部内面上半にかけてハケ調整、体部外面下半は叩き後にハケ調整を施す。

117は庄内式甕である。残存高6.1㎝、口径5.3㎝を測る。体部外面と口縁部内面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

118は深鉢である。残存高12.1㎝、口径9.2㎝、胴径10.0㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面上半にヘラ削りを施す。底部に脚が付くと思われる。

119 ～ 121・123は山陰系土器である。119は口縁部１／３からの反転復元で、残存高15.2㎝、口径12.8㎝、銅径15.9㎝を測る。体部外面はハケ調整、体部内面上半はヘラ削りを施す。

120は口縁部１／３からの反転復元で、残存高12.9㎝、口径12.9㎝、胴径15.4㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施し、肩部に３条１組の波状文を描く。

121は口縁部１／４からの反転復元で、残存高11.4㎝、口径14.0㎝、胴径18.0㎝を測る。体部外面はハケ調整、体部内面はヘラ削りを施す。

122は直口壺である。完形で、器高17.4㎝、口径9.8㎝、胴径13.1㎝を測る。口縁部内外面と体部外面に磨きを施す。底部は若干尖り気味となる。

123は口縁部１／２からの反転復元で、残存高12.6㎝、口径12.4㎝、胴径13.6㎝を測る。口縁端部は肥厚して玉縁状を呈する。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

124は小型鉢である。ほぼ完形で、器高6.7㎝、口径10.8㎝、胴径9.9㎝を測る。体部外面下半にハケ調整、体部内面上半にヘラ削りを施す。

125は小型丸底壺である。ほぼ完形で、器高6.4㎝、口径10.2㎝、胴径8.1㎝を測る。器の全面に磨きを施す。

126は山陰系土器の二重口縁鉢である。口縁部１／５からの反転復元で、残存高25.2㎝、口径34.0㎝、胴径37.3㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

127は高坏の坏部で、坏部ほぼ完存する。残存高7.8㎝、口径23.2㎝を測る。坏部外面はハケ調整後にやや粗い磨きを施し、坏部内面は丁寧な磨きを施す。

128は浅鉢である。口縁部１／３からの反転復元で、器高5.3㎝、口径15㎝、胴径11.8㎝を測る。体部外面下半にハケ調整、体部内面に磨きを施す。

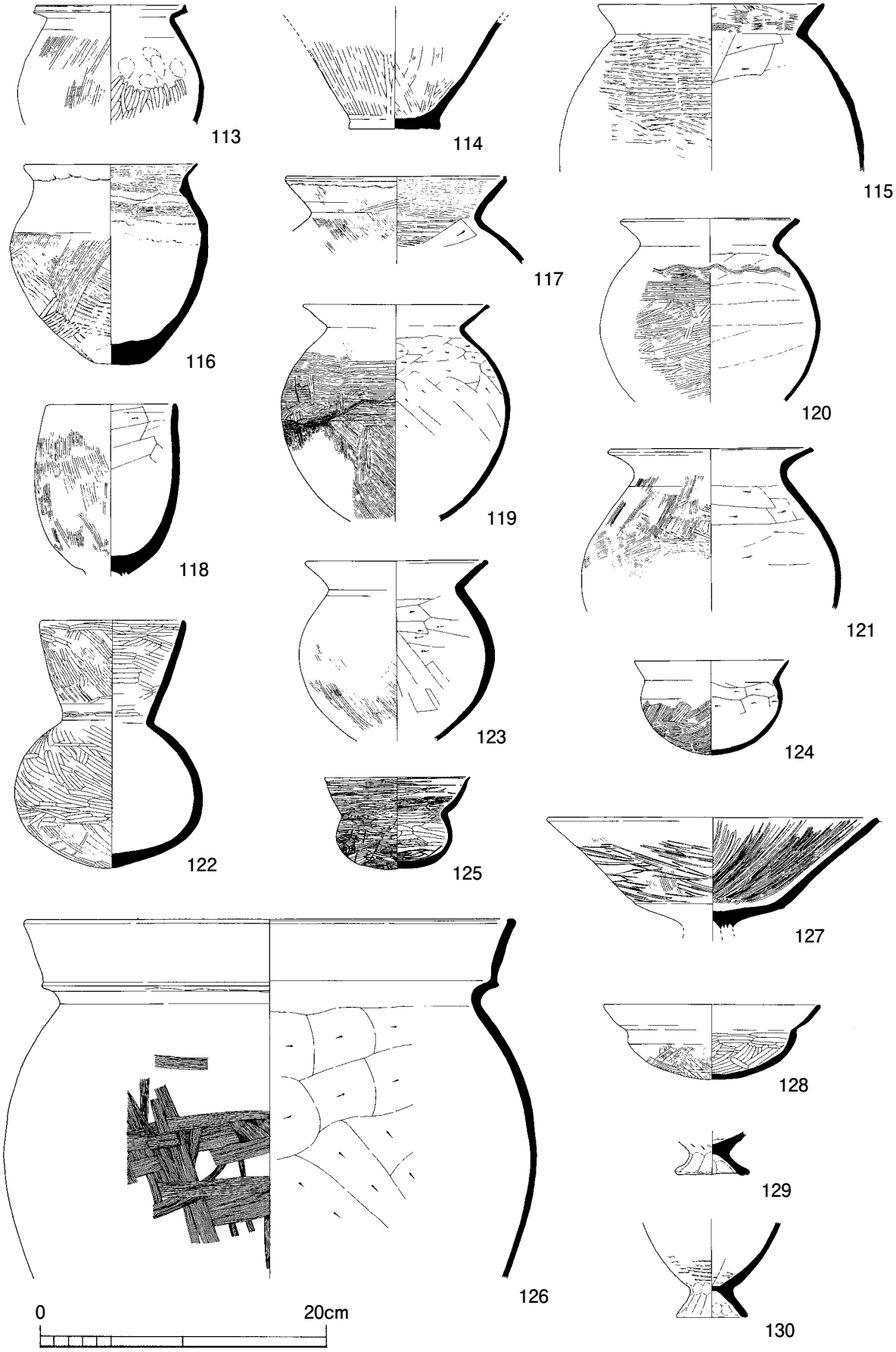
129・130は鉢型製塩土器である。ともに布留式期（古墳時代前期）に相当する。129は脚部である。残存高3.1㎝、底径4.9㎝を測る。外面に叩き目を施し、脚部に指押え痕を残す。

130は体部下半から脚部にかけてのものである。残存高4.7㎝、底径4.8㎝を測る。体部外面に叩き目、体部内面に板ナデを施し、脚部に指押え痕を残す。

Ｂ区Ｇ６（第25図）

131・132・134は弥生土器である。131・132は摂津Ⅵ様式、134は近江Ⅴ様式（いずれも弥生時代後期）に相当する。

131は壺の体部である。残存高16.4㎝、胴径22.5㎝、底径4.8㎝を測る。体部外面はハケ調整後に上位と下位に磨き、内面は丁寧なハケ調整を施す。



第24図　SU1　B区G5出土遺物

132は深鉢である。ほぼ完形で、器高11.6㎝、口径10.9 ～ 11.2㎝、胴径11.5㎝、底径3.6㎝を測る。体部外面は叩き目が残り、体部内面は板ナデを施す。口縁部から体部にかけて煮沸時のふきこぼれの痕が残る。

134は近江系の鉢である。口縁部２／３が残存し、残存高5.9㎝、口径15.4㎝、胴径17.5㎝を測る。受口状口縁を持ち、体部外面はハケ調整後、肩部に刺突文と波状文を描く。なお接合はできないが、同一個体と思われる体部下半片も出土している。

133・135・136は土師器である。133は庄内式期（古墳時代初頭）、135・136は布留式期（古墳時代前期）に相当する。

133は鉢である。ほぼ完形で、器高7.6㎝、口径10.8㎝、胴径9.5㎝を測る。体部外面に叩き目が残り、口縁部内面にハケ調整を施す。体部に焼成後の不定形な孔を穿ち、底部は上げ底状となる。

135は山陰系土器である。口縁部１／２からの反転復元で、残存高9.5㎝、口径14.2㎝、胴径19.0㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

136は小型丸底壺である。口縁部は１／４残存し、体部は完存する。器高7.3㎝、口径11.0㎝、胴径9.5㎝を測る。体部外面下半にハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

137は土師質の管状土錘である。完形で、全長8.5㎝、胴径3.9㎝、孔径1.8㎝を測る。

Ｂ区Ｇ７（第26 ～ 29図）

138 ～ 146は弥生土器である。138・140は壺である。ともに摂津Ⅳ様式（弥生時代中期後半）に相当する。

138は壺の頸部から体部上半にかけてである。頸部１／３からの反転復元で、残存高14.4㎝を測る。頸部から体部にかけて波状文と凹線紋を交互に施す。

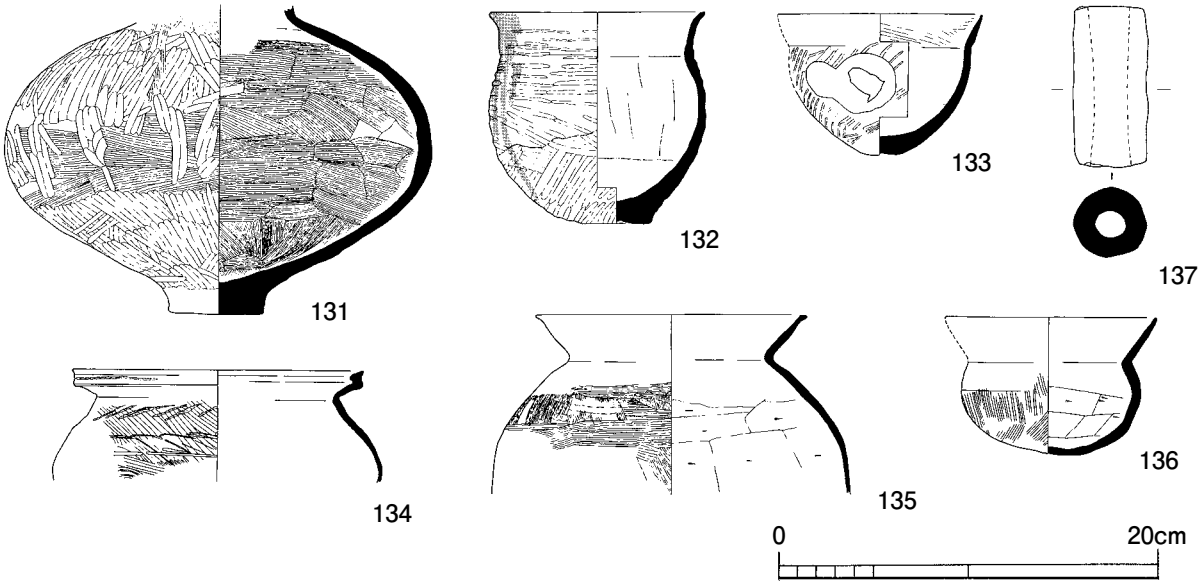
140は小型無頸壺である。完形で、器高5.5㎝、口径5.7 ～ 6.0㎝、胴径8.7 ～ 8.8㎝、底径3.9 ～ 4.4㎝を測る。体部外面に磨きを施し、口縁部に２個一対の小孔を穿つ。

141 ～ 145は甕である。141 ～ 143は摂津Ⅳ様式で、145は吉備Ⅳ様式（いずれも弥生時代中期後半）、144は摂津Ⅵ様式（弥生時代後期）に相当する。141は口縁部１／３からの反転復元で、残存高15.9㎝、口径14.0㎝、胴径18.6㎝を測る。体部外面は叩き後にハケ調整、内面にもハケ調整を施す。体部上半に煤が付着する。四国東部系と思われる。

142は口縁部１／４からの反転復元で、残存高9.7㎝、口径15.9㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面上半はハケ調整、下半は板ナデを施す。体部外面に連続する刺突文を施す。

143は口縁部１／２からの反転復元で、残存高10.8㎝、口径13.4㎝、胴径19.2㎝を測る。体部外面にハケ調整、体部内面上半はハケ調整、下半に板ナデを施す。

144は口縁部を一部欠損し、器高9.7㎝、口径12.0㎝、胴径11.0㎝、底径3.7㎝を測る。口縁部内面にハケ調整、体部外面に叩き目を残し、内面は板ナデを施す。焼成後体部の２か所に孔を穿つ。



第25図　SU1　B区G6出土遺物

145は吉備系土器である。口縁部が３／４残存する。残存高9.7㎝、口径15.6㎝を測る。体部外面に叩き目を残し、体部内面上半はハケ調整、下半はヘラ削りを施す。肩部にヘラ状工具による刺突文、体部に刺突紋を綾杉状に施す。

146は壺の把手である。残存高6.3㎝を測る。概ね弥生時代中期の所産である。

147 ～ 195は土師器である。147 ～ 149は甕形製塩土器である。いずれも布留式期（古墳時代前期）に相当する。147は口縁部１／４からの反転復元で、残存高5.4㎝、口径11.3㎝、胴径11.4㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面に板ナデを施す。

148は体部１／２からの反転復元で、残存高12.7㎝、口径10.6㎝、胴径18.0㎝を測る。口縁部外面に指押え痕を残し、体部外面は細かい叩き目を残し、口縁部から体部にかけて内面は板ナデを施す。

149は体部１／３からの反転復元で、残存高15.4㎝、胴径14.2㎝を測る。体部外面に叩き目を残し、内面上半は板ナデを施し、下半は粘土接合痕と指押え痕が顕著に残る。

150 ～ 152・154・155は甕である。150・151は庄内式期（古墳時代初頭）、その他は概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。150は長胴甕である。口縁部７／８は欠損するが、体部はほぼ完存する。器高21.9㎝、口径13.0㎝、胴径16.8㎝を測る。口縁部内面にハケ調整、体部外面は叩き後に板ナデを施す。

151は山陰系土器である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高9.8㎝、口径12.2㎝、胴径12.4㎝を測る。体部内面にヘラ削りを施す。152は布留式甕である。口縁部は完存し、残存高13.0㎝、口径14.1㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。口縁部から肩部にかけてふきこぼれ痕が残る。

154・155は東海系土器のＳ字状口縁甕である。いずれも体部外面にハケ調整を施し、内面には指押え痕が残る。155は口縁部１／３からの反転復元で、残存高6.4㎝、口径14.6㎝を測る。

154は口縁部１／４からの反転復元で、残存高4.9㎝、口径10.6㎝を測る。154は口縁部１／４からの反転復元で、残存高4.9㎝、口径10.6㎝を測る。

153・156は鉢である。153は浅鉢である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高4.1㎝、口径12.5㎝を測る。体部外面下半に板ナデを施す。布留式期新相に相当する。

156は深鉢である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高8.0㎝、口径16.4㎝、胴径15.2㎝を測る。体部内外面にハケ調整を施す。庄内式期古相に相当する。吉備系土器と思われる。

157 ～ 170は壺である。160 ～ 163は庄内式期（古墳時代初頭）、158・159は布留式期（古墳時代前期）に相当する。

157は吉備系土器（酒津式土器）の二重口縁壺である。完形で、器高37.0㎝、口径20.2㎝、胴径33.1㎝を測る。口縁部内面に磨き、体部に叩き目を僅かに残し、上半は粗い磨き、下半はハケ調整、内面下半は板ナデを施す。弥生時代終末期～庄内式期併行（古墳時代初頭）に相当する。

158は二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／３からの反転復元で、残存高4.9㎝、口径22.4㎝を測る。口縁部外面下半にハケ調整、口縁部上半内外面に磨きを施す。

159は東海系土器（柳ヶ坪型壺）の二重口縁壺である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高6.1㎝、口径18.9㎝を測る。口縁部外面下半にハケ調整、内面下半に磨きを施す。口縁部内外面上半に列点紋を綾杉状に施文する。

160は壺の口縁部から肩部にかけてである。口縁部は完存し、残存高13.3㎝、口径15.1㎝を測る。口縁内外面から体部外面にかけて磨きを施し、体部内面にヘラ削りを施す。

161は残存高20.0㎝、口径14.4㎝を測る。口縁部内外面にハケ調整、体部外面は叩き目を残し肩部にハケ調整、内面にハケ調整を施す。

162は口縁部１／３からの反転復元で、残存高10.0㎝、口径14.6㎝を測る。口縁部内外面から体部外面にかけてハケ調整、体部内面にヘラ削りを施す。

163は口縁部が完存し、残存高11.0㎝、口径13.8㎝を測る。内外面全体にハケ調整を施し、体部内面に粘土接合痕が残る。

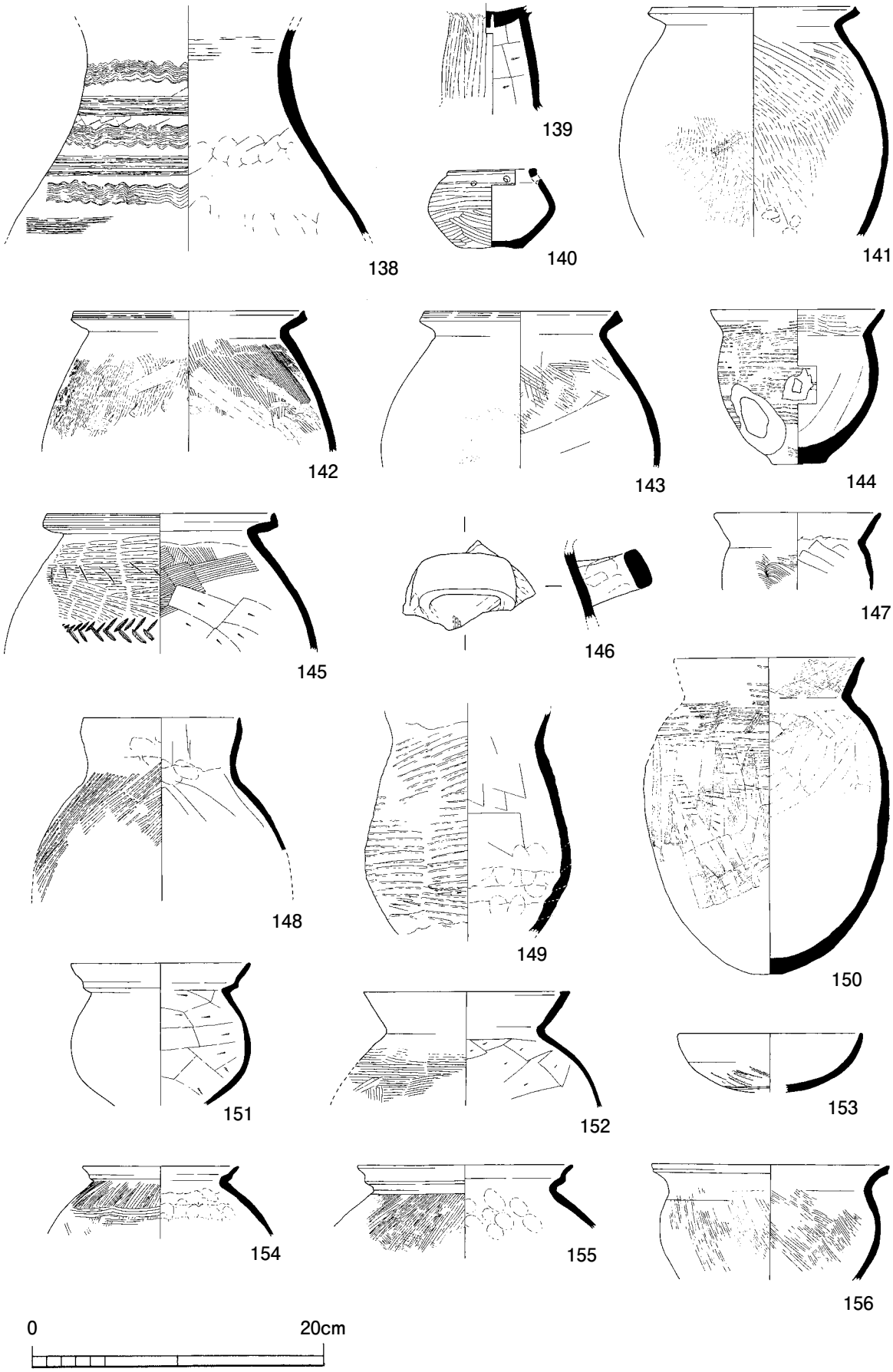
164 ～ 166は四国東部系土器の、二重口縁壺の口縁部である。庄内式～布留式併行期（古墳時代初頭～前期）に相当する。164は残存高22.6㎝、口径23.4㎝を測る。口縁部外面にハケ調整、頸部に磨き、体部外面に板ナデ、内面全体にハケ調整を施す。

165は口縁部１／３からの反転復元で、残存高11.5㎝、口径20.6㎝を測る。

166は口縁部。口径１／７からの反転復元で、残存高8.8㎝、口径18.6㎝を測る。口縁部外面下半にハケ調整が残る。

167 ～ 170は布留式期（古墳時代前期）に相当する。167は口縁部１／２からの反転復元で、残存高22.8㎝、口径18.4㎝、胴径26.8㎝を測る。体部外面にハケ調整、内面にヘラ削りを施す。

168は口縁部７／８を欠損し、体部はほぼ完存する。器高29.4㎝、口径16.0㎝、胴径24.3㎝を測る。体部外面にハケ調整を施す。



第26図　SU1　B区G7出土遺物（1）

169はほぼ完形で、器高23.3㎝、口径14.9 ～ 15.6㎝、胴径20.2㎝を測る。口縁部外面と一部内面、体部外面にハケ調整を施し、体部内面下半にヘラ削りを施す。布留式甕のような球形の体部に吉備系土器を彷彿させる二重口縁部が付き、体部に煤が付着する。類例の少ない土器である。

170は完形で、器高17.3㎝、口径10.9㎝、胴径15.1㎝を測る。口縁部内外面と体部外面にハケ調整、体部内面に板ナデを施す。

171 ～ 178は小型丸底壺である。概ね布留式期（古墳時代前期）に相当する。171は口縁部１／２が残存し、体部は完存する。器高6.9㎝、口径10.5㎝、胴径8.4㎝を測る。口縁部内面と体部外面に磨きを施し、底部にヘラ削りを施す。

172は体部が完存し、残存高4.4㎝、胴径7.0㎝を測る。体部外面と内面下半に磨きを施す。

173は残存高7.2㎝、胴径8.2㎝を測る。口縁部内面と体部外面上半はハケ調整、下半は磨きを施す。

174は口縁部１／２が残存し、体部はほぼ完存する。器高9.7㎝、口径11.6㎝、胴径8.4㎝を測る。外面と口縁部内面にハケ調整後に磨きを施す。

175は口縁部１／２からの反転復元で、器高7.8㎝、口径11.6㎝、胴径8.1㎝を測る。体部上半は板ナデ、下半はヘラ削り、内面底部に板ナデを施す。

176は体部２／３が残存し、器高7.8㎝、口径9.8㎝、胴径7.6㎝を測る。体部外面に磨き、内面上半に板ナデを施す。

177は完形で、器高6.8㎝、口径7.2㎝、胴径7.2㎝を測る。口縁部外面にハケ調整、内面と体部外面に磨きを施す。

178は口縁部１／２からの反転復元で、残存高9.5㎝、口径9.0㎝、胴径10.6㎝を測る。体部外面にハケ調整を施し、体部内面上半はヘラ削りを施す。

179 ～ 184は器台である。179は庄内式期（古墳時代初頭）、それ以外は布留式期（古墳時代前期）に相当する。179は残存高5.4㎝、口径9.3㎝を測る。受け部内外面と台部に磨き、台部内面にハケ調整を施す。３か所に円孔が残り、本来４か所だったとみられる。

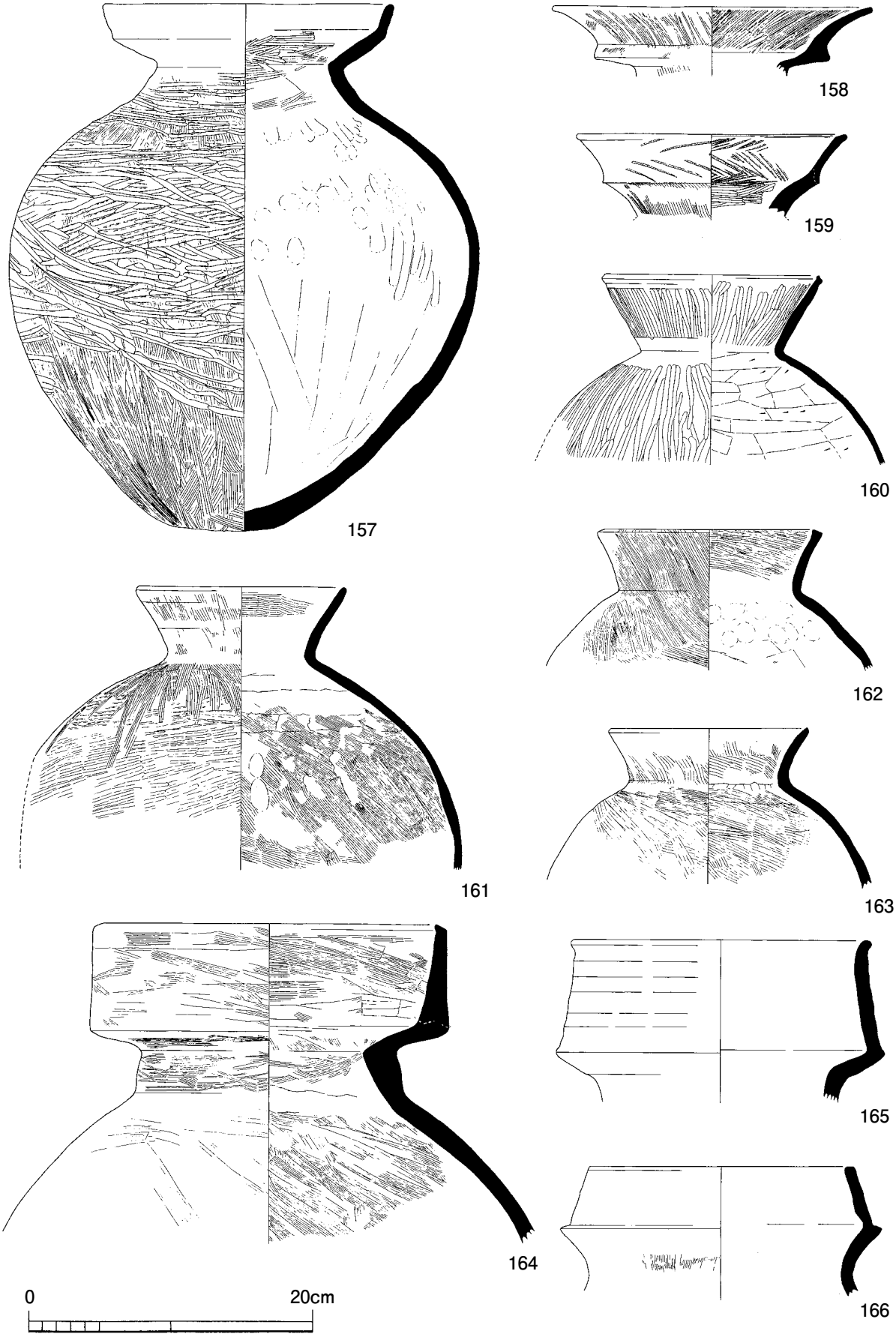
180は大型の器台で、口縁部３／４が残存し、器高13.2㎝、口径18.5㎝、裾径21.6㎝を測る。外面にハケ調整を施す。

181は小型器台である。残存高5.2㎝、口径9.3㎝を測る。受け部外面はハケ調整後に磨き、内面に磨き、台部内面にハケ調整を施す。

182は脚部の一部が欠損し、器高7.3㎝、口径8.8㎝、裾径10.9㎝を測る。受け部内面はハケ調整後に磨き、台部外面に磨き、内面にハケ調整を施す。

183・184は山陰系土器の鼓形器台である。ともに庄内式～布留式併行期（古墳時代初頭～前期）に相当する。183は受け部である。口縁部１／７からの反転復元で、残存高7.0㎝、口径16.6㎝を測る。受け部内面に磨きを施す。

184は脚部である。裾部１/10からの反転復元で、残存高5.4㎝、裾径14.3㎝を測る。台部内面



第27図　SU1　B区G7出土遺物 (2)

にヘラ削りを施す。

185 ～ 187は高坏の坏部である。185は坏部が完存し、残存高7.3㎝、口径21.4㎝を測る。外面にハケ調整、内面はハケ調整後に磨きを施す。庄内式期（古墳時代初頭）に相当する。

186は口縁部２／３が残存し、残存高6.4㎝、口径15.4㎝を測る。外面はハケ調整、内面はハケ調整後に磨きを施す。布留式期（古墳時代前期）に相当する。

187は坏部が完存し、残存高5.7㎝、口径14.9㎝を測る。内外面に磨きを施す。庄内式～布留式期（古墳時代初頭～前期）に相当する。

188 ～ 190は高坏の脚部である。188は弥生時代後期、189・190は布留式期（古墳時代前期）に相当する。188は脚部を一部欠損し、残存高6.2㎝、裾径14.0㎝を測る。脚部は磨き、裾部はハケ調整後に磨きを施す。４方向に円孔を穿つ。

189は脚部が完存し、残存高8.9㎝、裾径11.8㎝を測る。脚部外面はハケ調整、裾部外面は磨き、内面はハケ調整を施す。

190は脚部が完存し、残存高11.9㎝、裾径12.0㎝を測る。外面全体と裾部内面にハケ調整を施す。

191・193は台付鉢である。191は山陰系土器である。図化部はほぼ完存し、残存高2.5㎝、底径4.0㎝を測る。鉢部の内外面ともに磨きを施す。布留式期併行期（古墳時代前期）に相当する。

193は口縁部の一部を欠損し、器高6.7㎝、口径9.6㎝、裾径6.4㎝を測る。鉢部内外面にハケ調整、鉢部下半から大部外面にかけてヘラ削りを施す。庄内式～布留式期（古墳時代初頭～前期）に相当する。

192は土師質の管状土錘である。完形で全長5.4㎝、胴径2.6㎝、孔径1.3㎝を測る。

194・195は鉢形製塩土器である。ともに布留式期（古墳時代前期）に相当する。194は台部が完存し、残存高4.0㎝。裾径5.0㎝を測る。体部外面に叩き目を残す。

195は台部が１／２残存する。残存高2.8㎝、底径3.8㎝を測る。

Ｂ区区画不明（第30図）

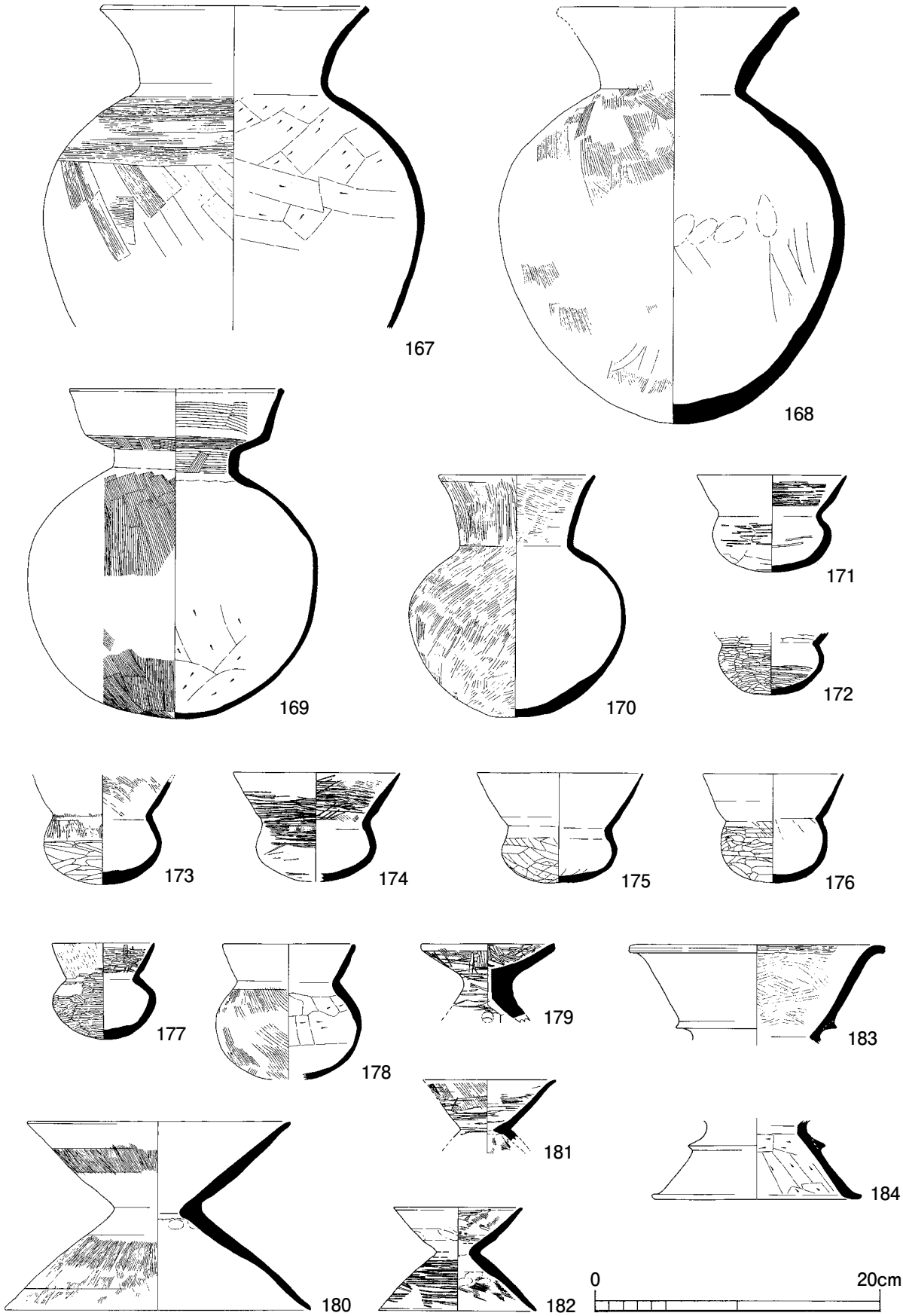
以下は、Ｇ５またはＧ６のいずれかからの出土である。

196・197は土師器壺である。ともに布留式期（古墳時代前期）に相当する。196は器高10.2㎝、口径9.0㎝、胴径11.3㎝を測る。体部外面に板ナデを施す。

197は東海系二重口縁壺の口縁部である。口縁部１／４からの反転復元で、残存高8.1㎝、口径17.2㎝を測る。口縁部の内面と外面に列点文を綾杉状に施す。口縁部から体部外面にかけてハケ調整、内面はヘラ削りを施す。なおＧ７出土の159とは接合はできないが、形状や色調が酷似することから、同一個体の可能性がある。

198 ～ 201は須恵器である。198・201は高蔵216型式（５世紀前半）、199・200は高蔵208型式（５世紀中頃）に相当する。

198・199は瓹である。198はほぼ完形で、器高10.6㎝、口径8.9㎝、胴径10.0 ～ 10.3㎝を測る。



第28図　SU1　B区G7出土遺物 (3)

口縁部下半に９条１組の波状文を施す。

199は口縁部を３／４ほど欠損し、体部は完存する。器高13.8㎝、口径10.0㎝、胴径12.6㎝を測る。口縁部上半に６条１組の波状文を施す。

200は坏蓋である。口縁部１／２からの反転復元で、器高4.3㎝、口径11.9㎝を測る。天上部は丁寧なナデを施す。201は坏身である。口縁部１／３からの反転復元で、器高4.9㎝、口径10.8㎝を測る。

［木製品］（第31・32図）

202～204はＧ４からの出土である。いずれも桜と思われる樹皮を紐状に加工する。202は全長4.1㎝、径2.4㎝、厚さ0.2～0.5㎜を測る。203は残存長32.6㎝、最大幅3.6㎝、厚さ0.5㎜を測る。204は幅1.5～2.0㎝、厚さ0.2～0.5㎜を測る。

205はＧ７からの出土である。縦15.4㎝、横15.1㎝、厚さ２㎜を測る。薄い板を円形に加工し、２か所に径３㎜と４㎜の小孔を穿つ。折敷のような曲物の底板の可能性がある。

206はＧ２出土である。残存長80.2㎝、最大幅3.5㎝、厚さ2.1～2.4㎝を測る。全体を角材状に加工し、先端部もホゾ状に加工する。

207はＧ５出土である。全長61.7㎝、幅7.4㎝、厚さ2.0㎝を測る。中央に方形の孔を穿ち、両端を突起状に加工する。農具の「大足」の部材と思われる。

208はＧ７出土である。残存長124.7㎝、径5.0～6.3㎝を測り、片側を欠損する。はた織りの腰当のような紡織具と思われる。

209～212は木杭である。すべてＧ７から出土した。いずれも枝を払っただけで、樹皮や枝痕をそのまま残し、先端部のみを鋭角的に加工する。209は残存長121.9㎝、最大径4.3㎝を測る。210は残存長120.3㎝、最大径5.0㎝を測る。211は残存長68.5㎝、径4.8㎝を測る。212は残存長70.6㎝、径3.3～5.5㎝を測る。表面に被熱痕が見られる。

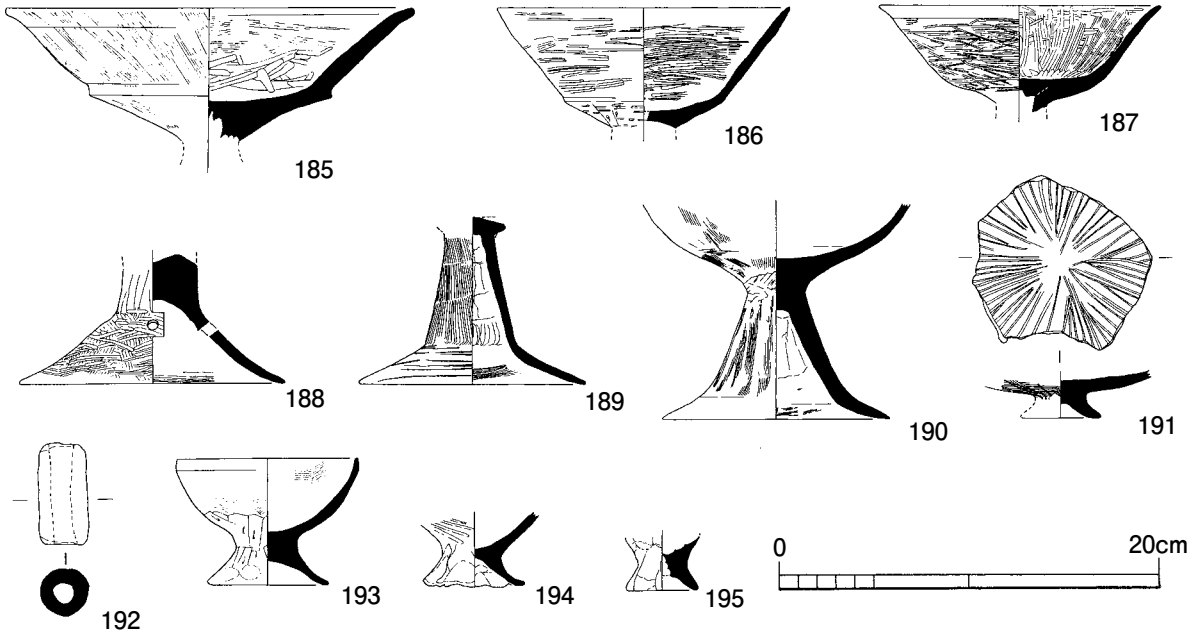
［石製品］（第33図）

213はＧ２出土である。全長16.8㎝、最大径6.3㎝を測る。表面は平滑で、表面下部の一部は剥離している。たたき石の可能性がある。

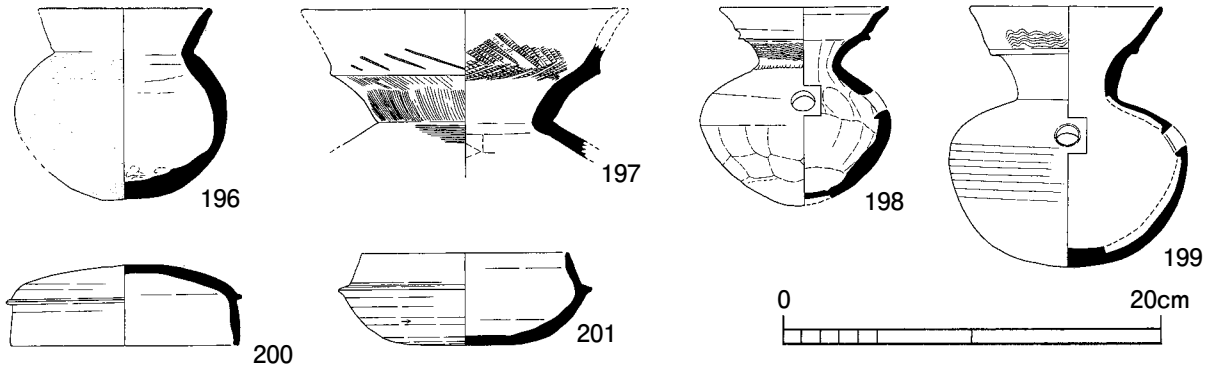
214はＧ５－６からの出土である。全長5.5㎝、全幅5.1㎝、厚さ2.6㎝を測る。砥石の可能性がある。

[骨角器・自然遺物]（図版32）

215はイノシシの歯で、Ｇ４出土である。218は貝殻である。主にＧ７出土である。217は骨角器で、Ｇ７出土である。シカの骨に直径３～４㎜の孔を穿っている。用途は不明であるが、モリなどの漁労具の可能性がある。



第29図　SU1　B区G7出土遺物（4）



第30図　SU1　B区出土区画不明遺物

【参考文献】

大手前大学史学研究室　2007『弥生土器集成と編年―播磨編―』

田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店

田原本町教育委員会　2016『唐古・鍵遺跡考古資料目録Ⅱ―土器編２（弥生・搬入・特殊）―』

近つ飛鳥博物館　2006『年代のものさし―陶邑の須恵器―』

寺沢薫・森岡秀人編　1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社

寺沢薫・森岡秀人編　1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社

（財）八尾市文化財調査研究会　1993「久宝寺遺跡第１次調査（KH84- １）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』

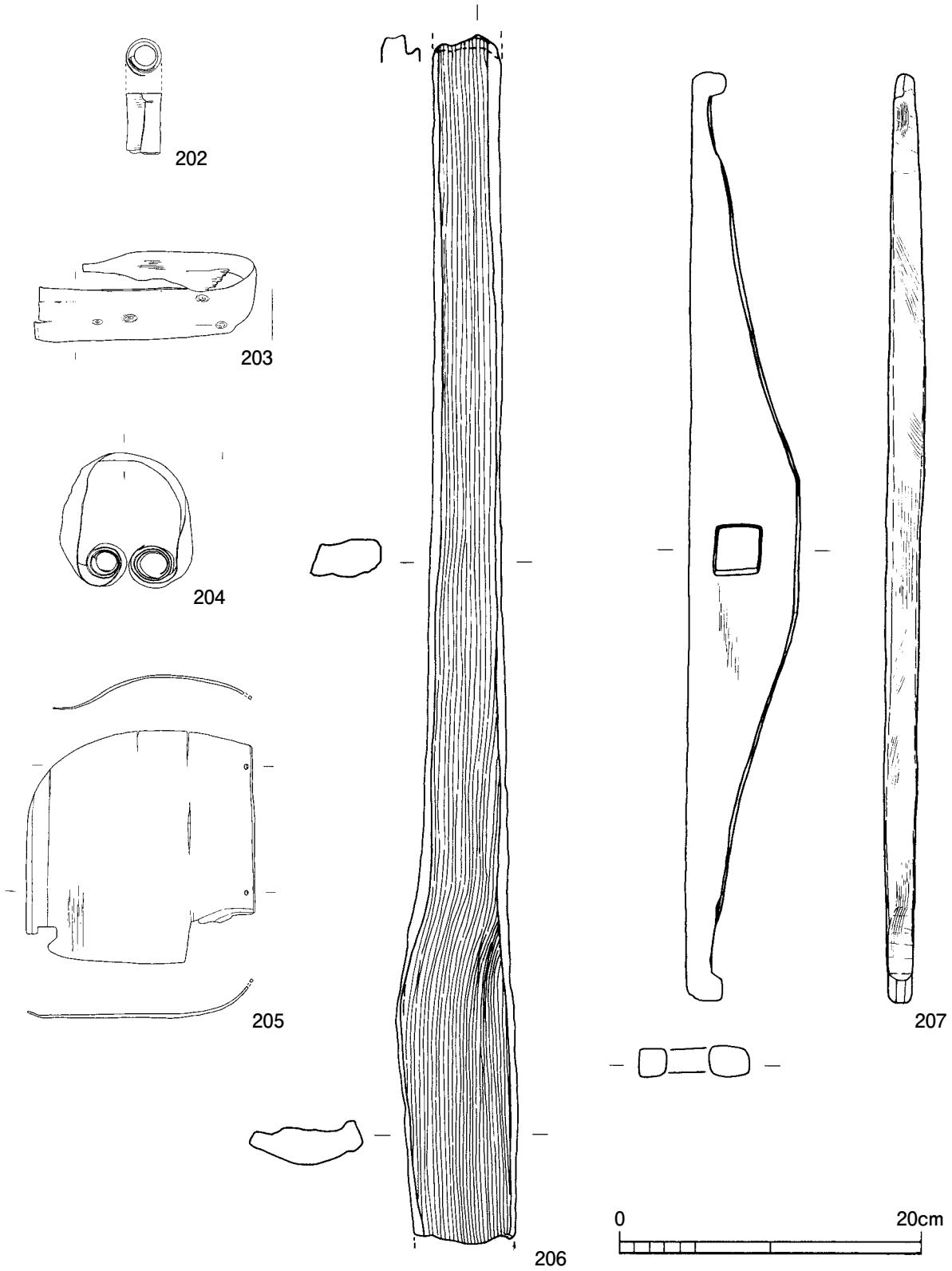
中村浩　2001『和泉陶邑窯 出土須恵器の型式編年』　芙蓉書房出版

奈良県立橿原考古学研究所　2000『大和木器資料』Ⅰ

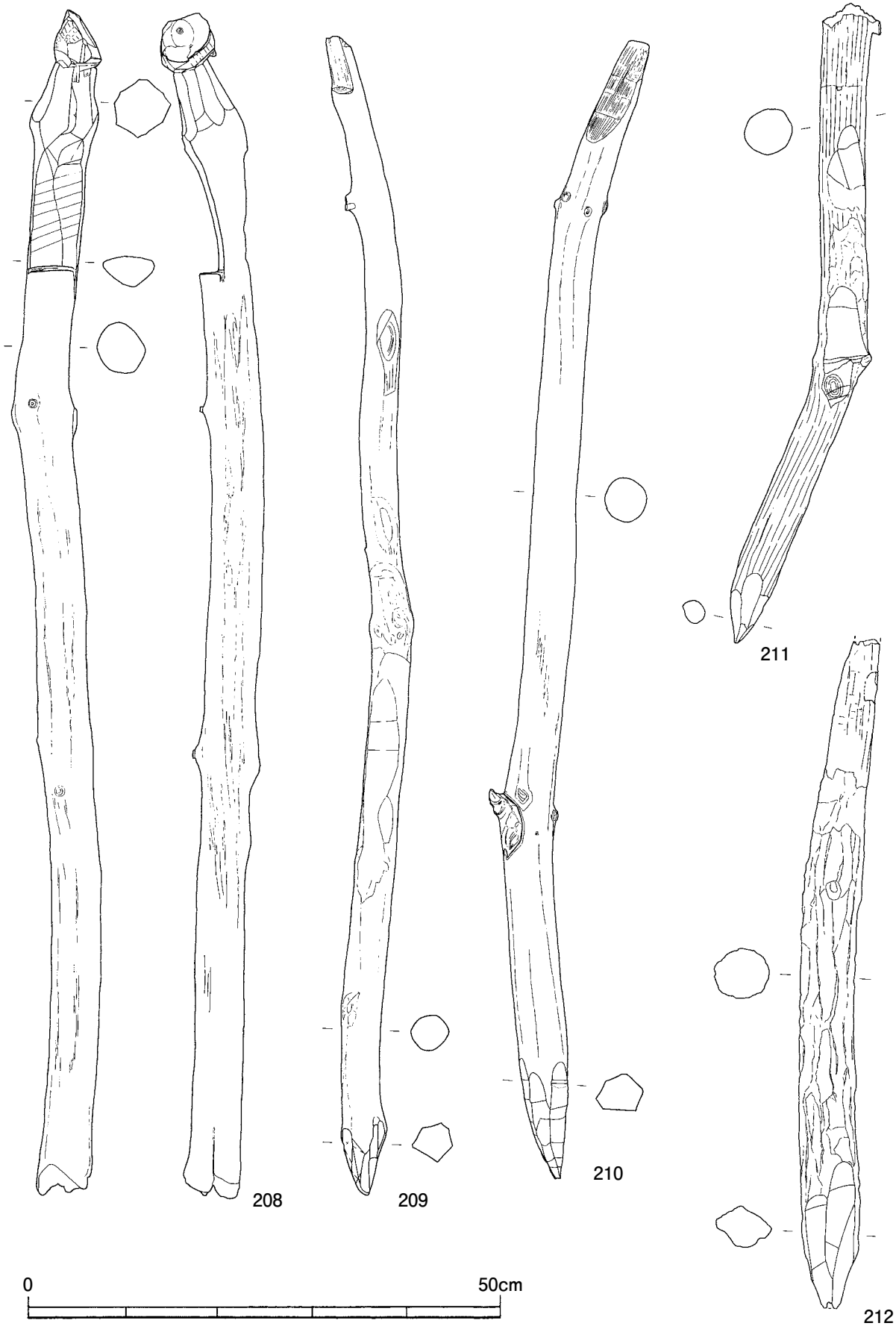
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録』近畿原始編

北條芳隆・禰宜田佳男編　2002『考古資料大観』９弥生・古墳時代（石器・石製品・骨角器）　小学館

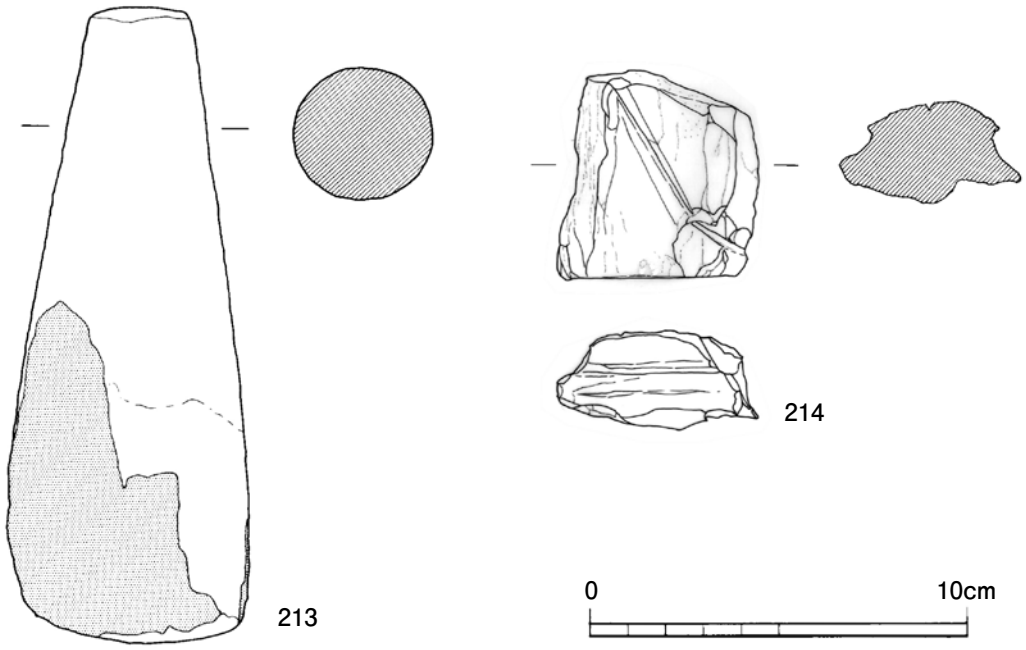
正岡睦夫・松本岩雄編　1992『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社



第31図　木製品（1）　　202～204：G4　205：G7　207：G5



第32図　木製品 (2)　　208 ～ 212：G7



第33図　石製品　　213：G2　214：G5－6

森岡秀人・竹村忠洋　2006「摂津地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
八尾市立埋蔵文化財調査センター　2006『やおの古墳時代Ⅱ―古式土師器のうつりかわり―』
八尾市立埋蔵文化財調査センター　2007『やおの古墳時代Ⅱ―５・６世紀の土器のうつりかわりと集落―』
八尾市立埋蔵文化財調査センター　2011『やおの弥生時代Ⅰ（前期～中期）―稲作文化の広がりとくらし―』
八尾市立埋蔵文化財調査センター　2012『やおの弥生時代Ⅱ（後期）―弥生時代から邪馬台国時代へ―』
米田敏幸1994　「河内における所内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会

第４章　まとめ

調査区全域にわたり古墳時代の河道を検出した。河道は断面観察により重複関係が認められ、新旧２時期が見られた。ただし新旧河道の出土遺物の年代観には、ほとんど時期差が認められなかった。このことから２条の河道は時期差と言うよりも、一つの大きな河道が浸食と堆積を繰り返しつつ、流路を変更しながら河道堆積物により埋没して河床を浅くしていく過程を示しているものと考えられる。河道堆積土最上層から初期須恵器や韓式系土器が出土していることから、河道が完全に埋没したのは古墳時代中期（５世紀中頃）と見られる。

河道堆積土から多量の土器が出土したことから、当地は弥生時代から古墳時代にかけての集落付近に位置していた可能性が高いと考えられる。特に吹田市内では弥生時代中期以前の遺跡が少ないことから、弥生時代集落の動向を考えるうえでも、大変貴重な資料と言える。

またＧ７区を中心として木杭や紐状の樹皮が出土した。いずれも河道堆積土からの出土であり、河床から浮いた状態であった。垂水南遺跡の既往調査では、杭に横木をわたして紐状の樹

皮で結び固定した、井堰や護岸状施設が確認されている。おそらく当調査地の周辺に井堰または護岸がかつて存在していて、その部材が流されてきたか廃棄された物が当地に埋没したものと思われる。

なお、出土遺物については、古墳時代のものが大半を占めていたが、古墳時代の土師器の中には、山陰系・吉備系・四国東部系・近江系・東海系などの外来系土器が含まれていた。これらの外来系土器は、当地域と他地域との人々や文物の交流を表していると言える。

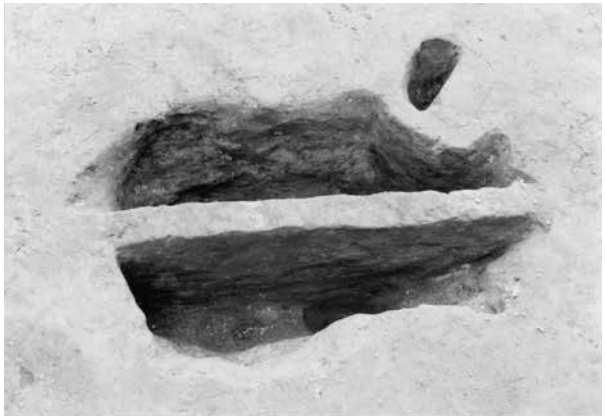
図版1　A区　全景

G1－G3（北から）

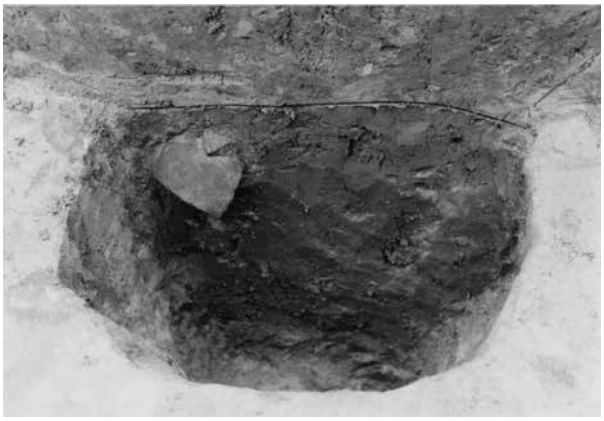
G2－G4（北西から）

図版２　Ａ区　各遺構

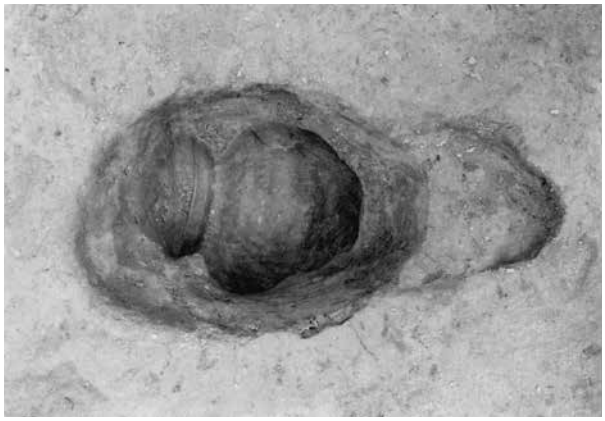
ピット群（南から）



Ｐ６



Ｐ１



Ｐ２

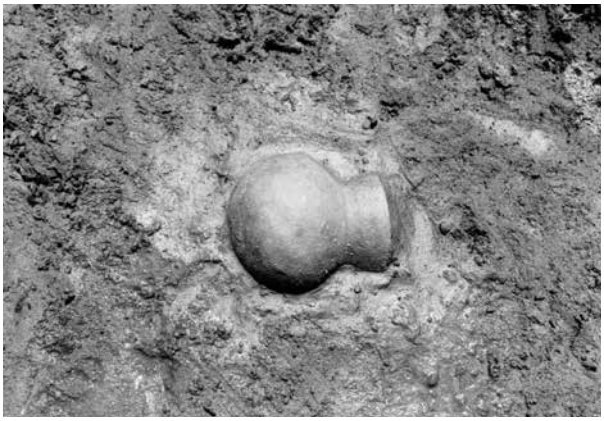
木杭Ｓ×１・２

弥生土器壺（G2：33）

土師器小型丸底壺（G1：21）

土師器高坏（G3：75）

土師器壺（G1：16）



土師器小型丸底壺（G3－4：110）

図版4　A区　土層断面

南壁断面（東半部）

南壁断面（西半部）

東壁断面（北半部）

東壁断面（南半部）

図版5　B区　全景

G5－6（西から）

G7（北から）

図版６　Ｂ区　遺物出土状況（１）

酒津式土器（G7：157）

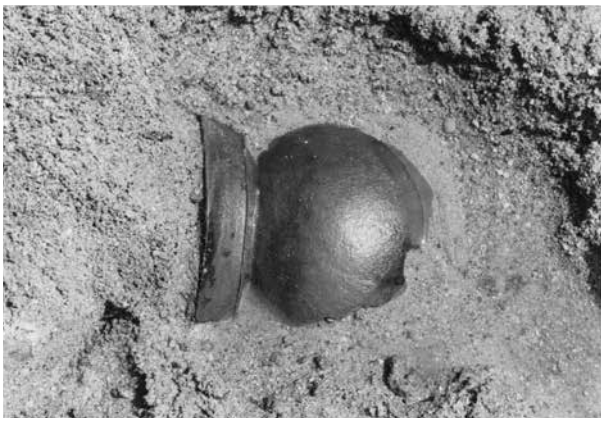
弥生土器壺（G6：131）

弥生土器甕（G5：115）

弥生土器窯（G7：145）

弥生土器無頸壺（G7：140）

須恵器瑹（G5－6：199）



土師器鉢（G5：126）

土師器甕（G5－6）

土師器鉢（G5：124）

須恵器瑹（G5－6：198）

図版８　Ｂ区　遺物出土状況（３）

土師器甕（G5：116）

土師器高坏（G7：185）

土師器壺（G5：122）

土師器台付鉢（G7：193）

土師器壺（G7：161）

土師器高坏（G7：189）

土師器器台（G7：180）

土師器高坏（G7：187）

土師器高坏（G7：186）

土師器壺（G7：168）

図版10　B区　土層断面

G5　西壁断面（上半部）

G5　西壁断面（下半部）

G7　西壁断面

遺物の取り上げ

人力掘削

遺構検出

遺構の実測

土層断面の実測

図版12　A区　弥生土器・土師器高坏（1）

12・28：G1　33～34・66：G3　101・102：G4　109：区画不明

図版13　A区　土師器高坏（2）

29

30

61

75

103

104

76

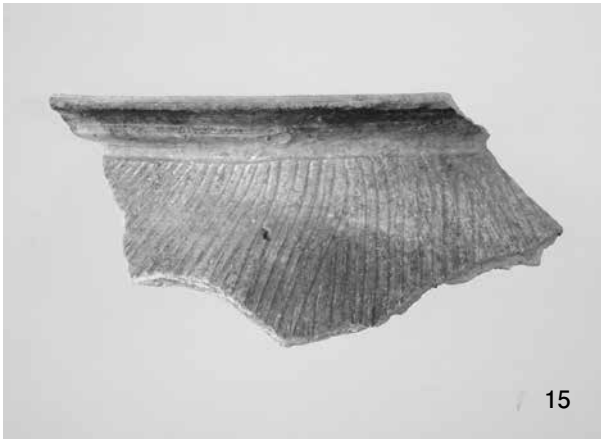
100

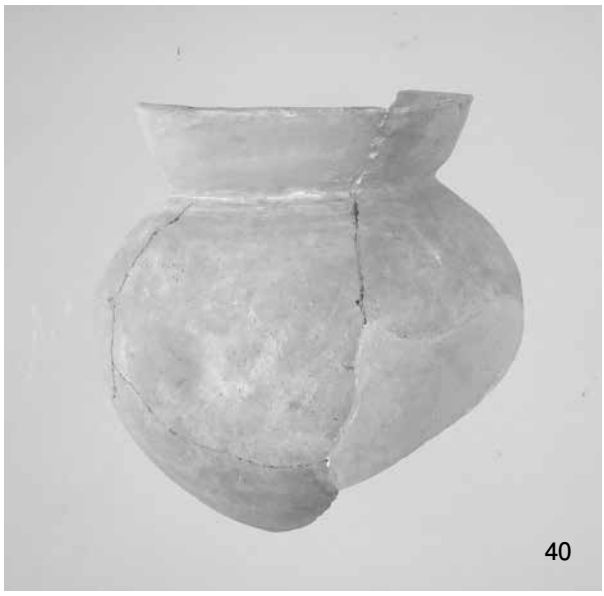
29・30：G1　61：G2　75・76：G3　100・103・104：G4

図版14　A区　土師器甕（1）

7：P2　11：G1　36・38・39：G2　77：G4

図版15　A区　土師器甕（2）





14・15・18：G1　40・41：G2　79・84：G4

図版16　A区　土師器壺（1）

16・19・20：G1　42・43・53：G2

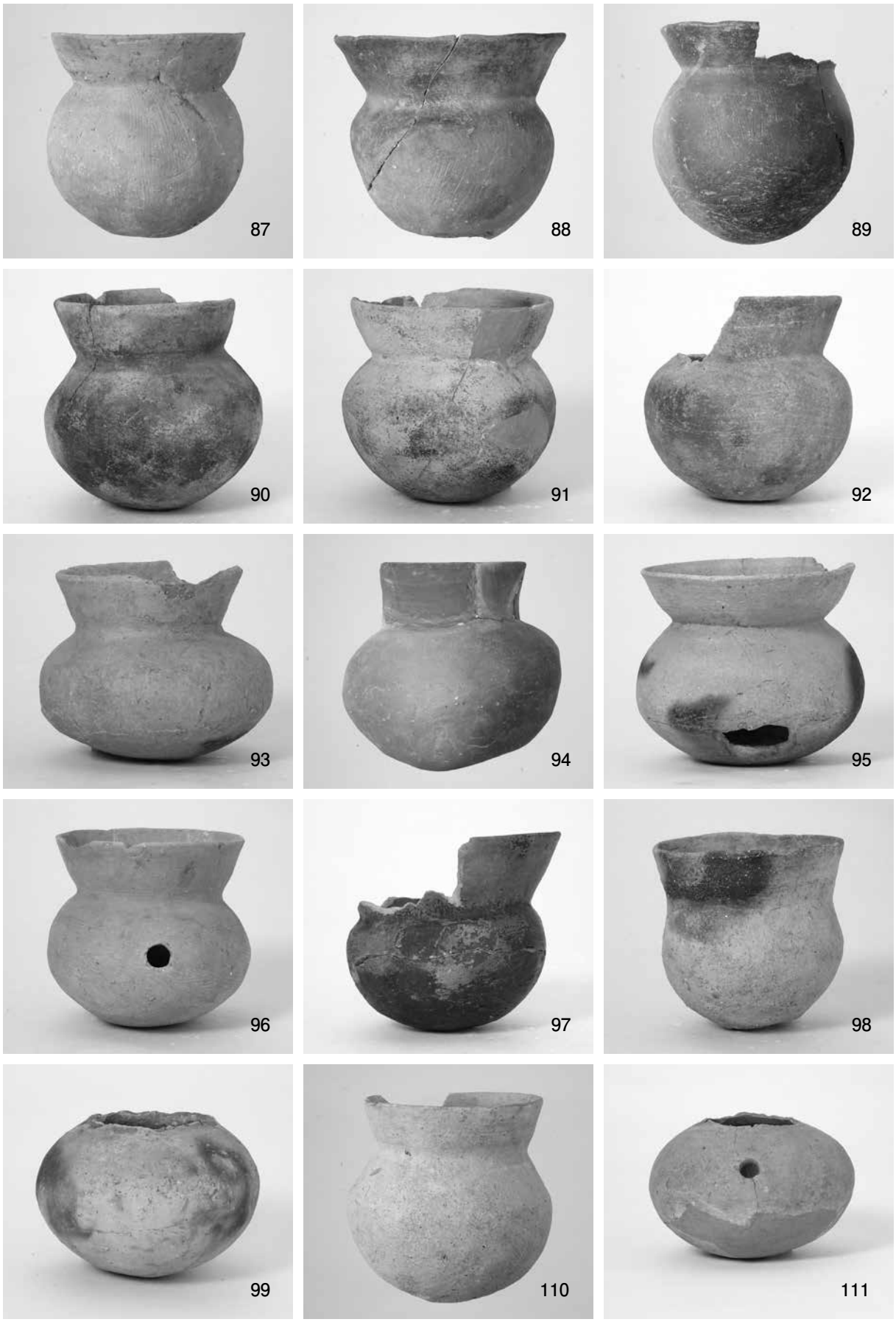
図版17　A区　土師器壺（2）

51・54～56：G2　80・83・85：G4

図版18　A区　土師器小型丸底壺（1）

17・21～23：G1　48～50・52：G2　67～71：G3　81・86：G4

図版19　A区　土師器小型丸底壺（2）



87～99：G4　110・111：区画不明

図版20　土師器鉢・器台・製塩土器

24

25

57

58

59

73

82

27

31

112

24・25・27・31：G1　57～59：G2　73：G3　82：G4　112：区画不明

図版21　A区　須恵器・韓式系土器

4～6：A区第Ⅳ層　62～65：G2　32：G1　105・106：G4

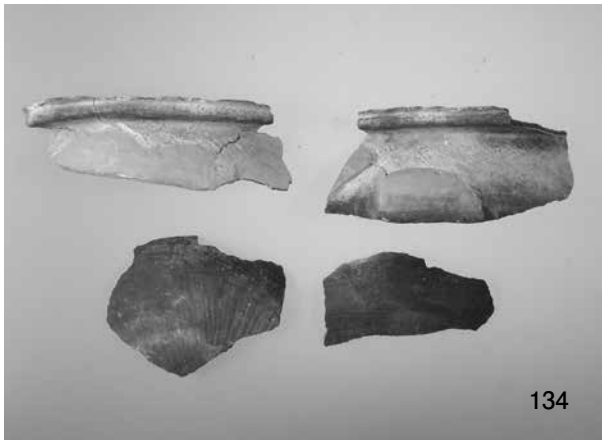
図版22　B区　弥生土器

114

131

132

133


134

138

140

145

114：G5　131～134：G6　138・140・145：G7

127

185

186

187

188

193

189

190

127：G5　185～190・193：G7

図版24　B区　土師器甕（1）

116・119・120・123・126：G5　150：G7

図版25　B区　土師器甕（2）

117

121

135

151

152

154

155

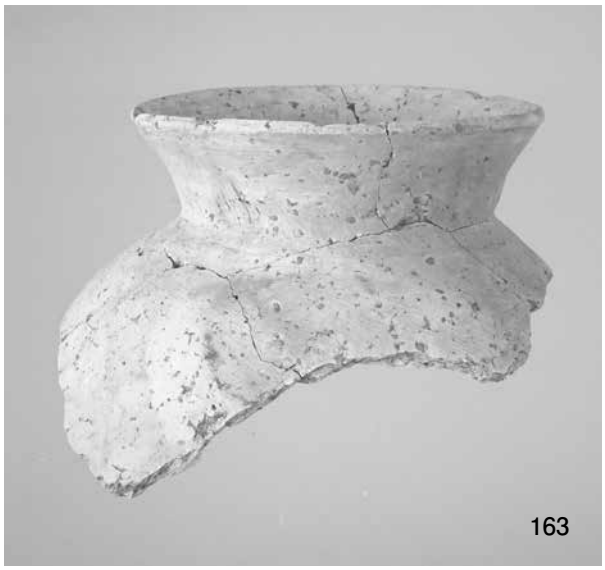
123

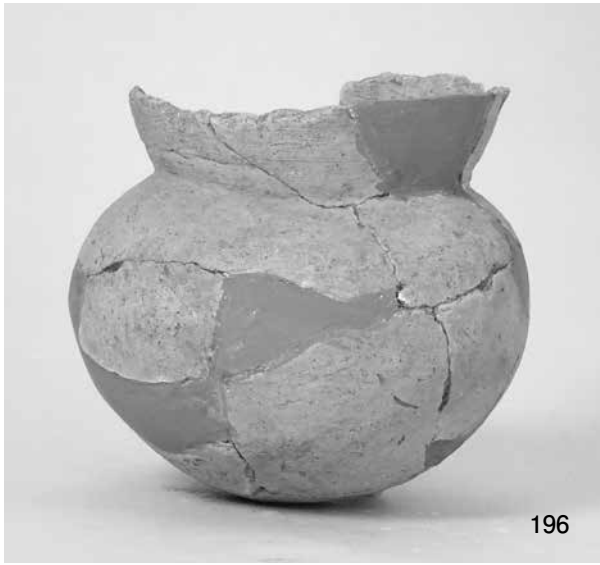
117・121・123：G5　135：G5　151・152・154・155：G7

図版26　B区　土師器壺（1）

122・157・164・168・169・170：G7

図版27　B区　土師器壺（2）





158・160～163・165・196：G7　196：区画不明

図版28　B区　土師器小型丸底壺・製塩土器

125

136

171

173

174

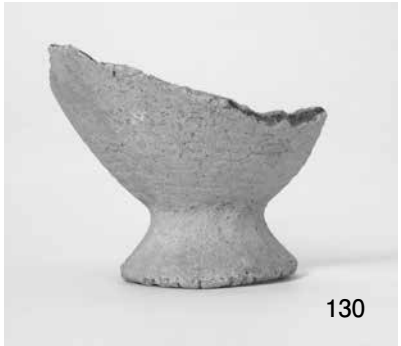
175

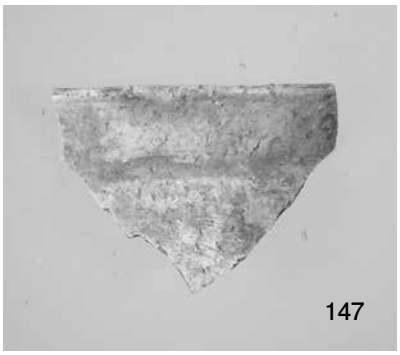
176

177

178

129


130


147

148

194

195

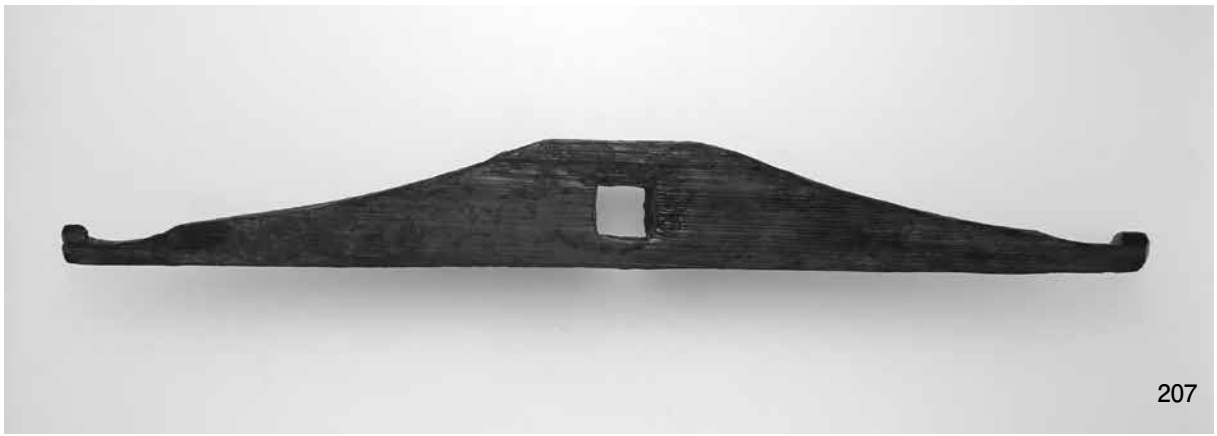
125・129・130：G5　136：G6　147・148・171・173～178・194・195：G7

図版29　B区　土師器鉢・土錘

118・124・128：G5　133・137：G6　156・191・192：G7

図版30　B区　土師器器台・須恵器

179 ～ 182：G7　3：B区第Ⅲ層　198 ～ 201：区画不明



207：G5　205・208：G7

図版32　石製品・自然遺物

213：G2　214：G5－6　215：G4　217：G7　218：G4－G7

報 告 書 抄 録

ふりがな	たるみみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょⅢ
書名	垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅲ
副書名	垂水南遺跡第58次発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0027　大阪府吹田市朝日町３番　TEL (06) 6155－8063
発行年月日	西暦　2018年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　緯 °′″	東　経 °′″	発掘期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
たるみみなみいせき 垂水南遺跡	すいたしたるみちょう 吹田市垂水町3-18-2	27205	88	34° 45′ 45″	135° 30′ 16″	20020730-20020925	550	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水南遺跡	集落遺跡	弥生時代	な　し	弥生土器	な　し
		古墳時代	河道跡、ピット、杭跡	土師器、須恵器、韓式系土器、紡織具、曲物底板、木杭、たたき石、砥石、獣骨	な　し

垂水南遺跡発掘調査報告書Ⅲ
－垂水南遺跡第58次発掘調査－

平成30（2018）年３月30日

編集　吹田市朝日町３番
発行　吹 田 市 教 育 委 員 会

この報告書は300部作成し、一部当たりの単価は514円です。